

演劇研究会編

淨瑠璃評判記集成
中

凡 例

一、本書は演劇研究会の共同調査による演劇資料の第四冊である。

一、前回の「浄瑠璃評判記集成 上」には宝暦までの太夫三味線人形遣三業の評判記を収めたが、今回はそれに引続いて明和以降の分を収録し、加えて浄瑠璃外題の評判記二種を収めた。

一、校訂の方針はできるだけ原本のままとした。ただし丁付けは原本の丁付けによらず、前回通り寒丁数に従った。

一、本書の原稿作製および校正は主として、石川・奥村・信多・角田・馬場・平野・堀江・松平・丸西・向井・森・盛田・祐田・横山・吉永が担当した。

一、本書の翻刻資料については、曹竹山城少掾・細川景正氏・早稲田大学付属演劇博物館・日比谷図書館・天理図書館より多大の便宜を与えられた。深く感謝する。

•

九〇頁

評判登利合

序

扶桑第一の大湊春の浪靜にして数万軒の間丸いらかをならべ立つゞく米屋の白土は難波津の白梅春を迎て盛をなすにひとしく今を仕合は吹付て北濱の播屋の九郎吉身代は息子に譲り今は隱居して陶吞幸と改名し此頃世上にもつぱら鶏合はやりて身代よき人は武士方町家によらず銘々鶏を飼付て毎日く所々の会所へ持出たがひにつよき鶏を自慢にする事つゝて後くは相撲場のことく四本柱水引土俵をしつらひ」(一)勝負わけに金銀のざいをふつて色くの名を付て評判する事成しにすでに京大坂江戸にては猶又様くの思ひ付有て別大坂北濱の陶吞幸は闘鶏の遊びを好み近国は申に及ばず関東奥州辺よりつよき鶏を取よせ尤飼付に功者成人をかへ鶏のいきほひつよく成餌を飼ける故近き所は猶更憐国にも隱居陶吞幸が鶏合に勝を取るはなかりしとや其頃長崎の町人にて唐人屋敷へ朝暮出入の用たし千倉沖右エ門といふて諸芸何もかも少づ」(二)覺へ年中

人交りにももれると言ふ事なく面白遊びにたのしみをなしてくらしぬ有時阿蘭陀舟の賄に遣ひ残りの大き成鶏一羽運つよくも道具の陰にかみ居るを見てふと心付是は唐渡りの鶏にて各別に有へしと思ひ人知らず羽織にそつと包かくし夕方持て宿に帰りよく鶏を仕込人に餌飼をならひ心を付て飼けるか大坂陶吞幸が鶏合の沙汰長崎迄も隠れなく千倉も是を聞て扱くそれはよき事哉我等思はず唐の鶏を飼付持けれども形象」(三)至てたくましく故人々恐れて鶏を合せ見たきと言人なし是によつて珍敷鶏を飼持たりと言へ共詮なき事に思ひしに近頃さいはいく急ぎ大坂に持行陶吞とやらが鶏合の自慢の鼻をひしき慰んと俄に其用意をとのへ夜を日について難波に來り旅宿も所に名高き鶏頭先生といふ大家の隱居に縁を求めて逗留し先何かなしに鶏合の会所くへ知る人に成り月並の会日に出席し鶏を合せんといふと言へ共所々の好人彼唐鶏を見て」(四)勝負させんと言人ひとりもなかりし時陶吞幸此はなしを聞て平日付そひ居たる咄相手に申さるゝは今世に専鶏合はやり色くの

名鶏を出し互に甲乙をわけ評判をなし銘々諍ひをたのしむ
 事実は出会はなしのなぐさみにて確執に及ぶ程のはげしき
 事をなさるに此度長崎より来りし千倉沖右エ門が鶏は唐
 土の鶏故全軀大高く形象すまじきと聞及ぶ去によつて如
 何程のよき鶏にても此方の鶏の恰合にては甚つり合あしく
 中く合せ」三見たきなんどと言人もなきよし我も色
 く大ぶりの名鶏飼持しといへども唐鶏と合せ見べきとは
 かつて思はず居たりが彼沖右エ門が餘りけんくわかおふの
 仕方心にくし何とぞ如何様にも方便をなして唐鶏をまけさ
 せるやうのしかたあらば物入は何程あらふ共夫は我ら入用
 次第出すべし皆く思案を頼むと申されければ皆さしうつ
 むいてとかふ返答する人なし其中に紙やの半四郎といふ男
 すゝみ出て申は私数年他事なく出会申物まねのげいしやに
 樂や与惣といふ者天性鶏唱の声を三まねる事上手にて余
 人のまねるとはかくだんのちがい第一世上のにはとり共が
 与惣がまねる聲を聞て皆一度に時を告るふしぎの男ゆへ歌
 舞妓芝居あやつり座にても鶏唱の入節は与惣を頼み用ゆる
 事年久しその上与惣めつらしき鶏を一羽持つねに手入をよ
 くいたして中く蹴合などさせる事はいさす只羽なみ惣
 体のきれいをよく仕入たる鶏なれば見る人誉め事なし此度
 の思召の聞鶏中く入りきにて及ふまじと存申なり与惣を
 御頼みあつてかれが持し鶏に仏神加護の刀を祈らせもふ」

負さされなばひとへに鶏の性と言はれし与惣などか奇特の
 なかるべし此義如何と申ければ陶呑も一座の衆も表是は
 尤神国の印に唐土のとり日本の鶏の渡りを付る分別此義
 よかるべしと各く申ければさあらば早々と惣を頼みかれ
 に仏神を祈らせ申べしと与惣方へ申遣しければ折節在宿し
 て夫の者をつれ立来りければ皆く悦び各々知る人となり
 一と通りの時宜合済おわつて陶呑幸右の次第を委物語して
 何とぞ与惣に仏神の刀を祈誓有つて所持の鶏を千倉が鶏と
 合せ」四長崎へ追返し所のいきほひを見せ度頼み是はお
 もひがけなき御頼みなれども我数年鶏の唱聲にて諸人によ
 なれたる身の上なれば御断も申がたく御差図にまかせ鶏を
 守らせ給ふ釜の神三宝荒神天照皇太神宮へ丹情をぬきんで
 祈誓申上その上にて久々飼馴し鶏に鳥類ながら念願の次第
 を申含め勝負致させ見申へしと請合立帰り夫より万事を打
 止め水を浴び火を清め一七日が間満ずるあかつきの夢に五
 才斗に見へてすこやか成童男与惣に向ひ言ふやうは此度
 其方」五鶏合に唐鶏倭鶏との勝負さする心願神納受有
 つて某を以て御告あるつつしんで承はれといふにぞ思はず
 飛しりかふべをたれてうやまいければ童子のいわく惣じ
 て鶏は陽気さかん成故羽なみ何れもあしく其方が飼しは餌
 飼軽きゆへ力よはくしても羽なみ外よりも生揃ふたり是に
 よつて神勅鶏の背の羽に残らず銀箔を置腹の方へ金箔を

置^(き) 金銀の鶏となし足には朱を以て色どり扱餌飼に随分二三
日が間うなぎじょうの類何にても勢のつよい餌をあたへ
養ふべし金銀の箔^(五) 惣身のねつをさまし鶏の勢甚^(六) つよ
く成^(七) へし此旨申聞せよとの神勅なり我は是^(八) そのむかし大友
の眞鳥が闘鶏に神刀^(九) を以てちいさき鶏にて勝を取^(一〇) たる国石
丸今 神童と成^(一一) つて是迄来れり猶^(一二) 行末力をそへんとかき
けすやうに夢は其儘^(一三) 極めて奇異の思ひをなし又々神徳い
やまし折^(一四) けりはや明日は別会の闘鶏千倉が鶏と楽屋が鶏と
蹴合の興行此事所々へ聞^(一五) へしが好人共見物に我もくくと
乗^(一六) 込ければ常々の見物と違ひ中々大人数を取^(一七) 込事ならずし
て俄に相憐^(一八) の壁を打^(一九) ぬき^(二〇) 棧敷を上と下へかけな
して顔みせ同前にさはぎける杜道理なれ其^(二一) 当日には近在近
憐名^(二二) を得し鶏共を持参し明六つ時よりそり立上下の棧敷
惣鉢の見物人いやはや爪も立ざる有様され共鶏合は是迄の
定め有りて闘取にて蹴合をなし、事ゆへその趣にとりはか
らひすでにた、かひ始りける勿ろん唐鶏の蹴合は大詰に
極次第^(二四) く合せける何れも名鶏西も東も凡廿五六蹴合け
れは早晝過に成^(二五) ける故どこ共なしに見物方よりもはや大詰
の蹴合にせよ外の勝負は常に有^(二六) としておそ^(二七) ひと
言^(二八) 出すと上下大きに騒動する杜尤^(二九) なれ時に会亭罷出^(三〇) とうざ
い^(三一) くと団扇を以てさはきを静め扱闘鶏の入割委^(三二) 延勝負
の始^(三三) りと言^(三四) ければ先東の方長崎より持来^(三五) りし唐鶏つ、立の

大四尺八寸足筋ふとく眼光中く人間にても只一つきに
成^(一) そふに思はれ見る人ぞつとして実は是迄蹴合なき杜尤^(二) と
どこ共なしに人々しづまりぬ然る所へ楽屋が鶏土俵へ入れ
ば其^(三) 丈漸^(四) 一尺四寸大きに恰合違^(五) ければ見る人けでんし是
は見るに及^(六) はず如何して合せらる、物と皆く思ふ所に土
俵の内をくるりく^(七) とたがひに廻り中く唐鶏に恐れぬ有
様見物少^(八) はきいの思ひをなしゐたるにたがひに^(九) 頭を
ふり立^(一〇) 菊花のことき首毛をいかりすき間をねらふ有様諸見
物息を詰^(一一) て物すさまじく思ふ折から左右方羽た、き蹴るよ
と見へしに倭鶏が羽た、く金銀の箔唐鶏の眼に当りしや俄
に土俵を飛出^(一二) 縁の下へかけ入行衛しらず失^(一三) たるは実神仏の
御守護にやふしぎと言ふも愚也惣見物声を上^(一四) 日本^(一五) の名鶏と
各どつとほめたりけるかゝる所へ上るり位付の評判例年之
通堂嶋の会所にてはじまるよし此見物人残らずおしかけん
と我もく^(一六) と急きけり陶吞幸悦び与惣を幸い評者の頭取と
なし其名を廣く酉の年陶吞幸と諸共にとりく^(一七) の品定めを
我おとらじと鶏の八声にうたふ千秋楽とさかぬ御代杜目出
度^(一八) けれ^(一九)

大坂之部

極上上吉 竹本政太夫

糸筋をたがへず通す播尸米

大上上吉 竹本錦太夫

節はるいなし最上の土佐米

大上上吉 豊竹鐘太夫

いつくでも知る其名は廣嶋米

上上吉 竹本染太夫

此節付を人々すいて聞く久留米

上上吉 竹本岡太夫

聞てやさしく思ひあかし米

上上吉 豊竹麓太夫

段く^(ハ)と出世あらん今ぞ日出米^(ハ)

上上吉 豊竹十七太夫

塩も名物氣を見る赤穂米

上上吉 竹本音太夫

小取まはしによく響く種子嶋米

上上吉 竹本文太夫

色で丸めたやうに聞へる嶋原米

上上吉 竹本綱太夫

細過てめつたに塩が唐津米

上上 豊竹喜代太夫

すき間をよく通す伊豫米

上上 竹本咲太夫

いろく^(ハ)心の多何や加賀米

上上 豊竹佐渡太夫

少しつ、舌打する様に織部米^(ハ)

上上 竹本三根太夫

そ、けぬやうに思ひます阿蘇米

上上 豊竹其太夫

折節にはかきる、姫路米

上上 豊竹八重太夫

一トふしとこやらが尼が嶋米^(ハ)

上上 豊竹紀志太夫

鳴戸の難所をこした河波米

上上 豊竹頼太夫

うるほふ本をた、へて丸亀米

上上 豊竹浅太夫

目出度おんせい住吉米

木上上吉 豊竹駒太夫

此道の賢人といふなり小松米」(九才)

三味線之部

上上吉 鶴沢文蔵 竹

ゆふく一座に羽をのす鶴崎米

上上吉 鶴沢名八 豊

やわらかなにしきに思ふ柳川米

上上吉 鶴沢寛次 豊

突出してよき表の備後米

上上 竹沢市太良 竹

きれいにむらのない河内米

上上 鶴沢又吉 竹

にはい有り気をつよひ相良米

上上 鶴沢仲助 豊

上ケ下ケ自由にした田辺米」(九才)

評判登利合

上上

大西文吾 竹

富沢万五郎 豊

大西貫蔵 竹

鶴沢辰之助 竹

鶴沢甚吉 豊

評判に連て人々三池米

京都之部

大上上吉 竹本春太夫

色は最上とあをく美濃米

上上吉 竹本中太夫

鏡のごとく照し給へ八田米

上上吉 竹本住太夫

倍も類なししつかりと能き岡崎米」(十才)

上上 竹本君太夫

わさくと茂ります笹山米

上上 竹本絹太夫

段く諸方の取かたが吉田米

上上 竹本 佐世太夫

見所聞所多近江米

上上 竹本 和佐太夫

一トくるめに取かこんた大垣米

上上 竹本 八尾太夫

聞てうかるゝふしは小室米

上上 竹本 信太夫

うつくしうてわらぬ伊万里米

巻軸

上上吉 竹本 土佐太夫

所替らす勤通した長門米」(十)

三味線 之部

上上吉 竹 沢 鬼 市

手ぎはのさへた所通り柳生米

上上吉 野 沢 吉 五 郎

いと安らかに聞のよいあの津米

上 竹 沢 岸 三 郎

上 富 沢 勝 次 郎

水車にて其名高し淀米

西条南かわ芝居沢村國太郎座本にて歌舞奴に操を取組にて出勤之分
左に印

太夫 扇谷 豊 前 掾

同 扇谷 元 太 夫

同 扇谷 喜美太夫

同 扇谷 生駒太夫

同 扇谷 富 太 夫

同 扇谷 多賀太夫

同 扇谷 増 太 夫

同 扇谷 和 哥 太 夫

同 扇谷 絵馬太夫

三味線 富 沢 長 蔵

同 大 西 金 二

同 竹 沢 甚 五 郎

同 鶴 沢 友 五 郎

同 野 沢 善 三

右歌舞奴芝居出勤故位定めかたし

江戸之部 「十一」

首受領之部

至

極上上吉 竹本大和掾

世界で随一ともてはやす尾張米

上上吉 豊竹丹後掾

万年も替らす聞たし魚田米

若手之部

上上吉 豊竹此太夫

一統にもてはやす仙台本国米

上上吉 竹本喜代太夫

手つよく出来ておほふ笠間米

上上吉 竹本志賀太夫

聞人かんにたへあとも岩付米

上上吉 竹本伊勢太夫

一としきりきつい当りを取た古河米「十二オ」

上上吉 竹本須广太夫

年く評判茂る森山米

評判登利合

上上吉 竹本村太夫

此次には語給ふと皆く松本米

上上 豊竹光太夫

手取り物と聞ゆる伊勢崎米

上上 竹本伊久太夫

うきやかなる聲は小諸米

上上 竹本折太夫

ひいきの連中より花を新庄米

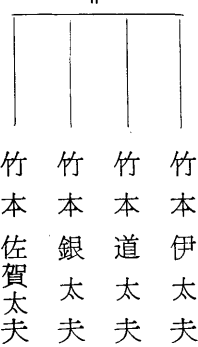
上上 豊竹菊太夫

べくりよく帯のごとし常陸米

上上 豊竹新太夫

師匠の風によく新田米「十二オ」

上上



声かゝる様にとひいきを松代米

上



のびやかに見渡す様也房州米

豊竹咲太夫

豊竹濱太夫

豊竹梅太夫

豊竹志津太夫

竹本妻太夫

三味線之部

大上上吉

野沢喜八

土

国くに聞へて其名は高崎米」(十三オ)

上上吉

鶴沢重次郎

肥

一ト座でも此人を館林米

上上吉

野沢富八

土

くつきりときれいな白川米

上上吉

鶴沢園治

肥

味ひかるし減香取米

上上

竹本左膳

土

近年めつきと秀た上総米

上上

かけ出す所つなきとある相馬米

富沢文次

八

肥

上



竹沢喜四郎

ト

竹沢平次

ヒ

竹沢富蔵

ト

木村勘蔵

ヒ

野沢喜次郎

ト

竹沢祐次

ヒ

鶴沢兵蔵

ヒ

野沢利八

ト

竹沢政蔵

ト

竹沢輝吉

ヒ

富沢文冥

ヒ

野沢金吾

ト

富沢伊三良

ト

鶴沢善蔵

ヒ

竹沢喜曾八

ト

竹沢鉄蔵

ト

位付の相談さまらぬ小原米

不出 豐竹肥前掾 座本

不出 西東市之亟 座本「(十四才)」

元祖豐竹越前少掾去秋古人に罷成候爰に印す

元祖 豐竹越前少掾

八十四歳終焉

法名

一音院直覺隆信日重居士

明和元甲申年九月十三日

(注) 以上黒地白抜き字

明和二年

酉三月吉日

浪花 東都軒

「(十四才)」

評判登利合

三 極 志

序

実や津の国の難波の事に至る迄豊なる世のためしこそ実道広き納なれくとどつとうたふて賑はひしは毎年正月十一日帳とち蔵開きの祝ひに親類縁者を招き年頭の祝義に例年松ばやしを興行して家門ことくはんしやうするは大坂淀屋橋に車大臣とて何もかも隠れなき福者の身のうへ水ノ谷泉右エ門といへる分限者也嘉例の松ばやし料理ごと済こ終ればあとは夜通し浄るりあやつりにて見物の人は年々聞及びに諸方よりいひ込有つておびた、敷きやくぞかし是にかぎらず年中の月待日待ニ浄るりあやつりをもよほしたのしみとする事此上もなき多いぐは也と好人皆くうらやみぬ翌日十二日には極まつて恵方参りとて氏神へ詣ふで諸方の景地を見めぐり夫より座敷舩きれいな料理茶屋住吉の難波屋方に立寄り其所にてまたくさまの遊びこをなしたのしむ事ゆへ平日出入りするのしやげい者尤たいこ持末社風の者共をどこへも引連行るればけふしもにぎやかなる茶屋のさはぎはおもしろい共いはんかたなし大臣は床柱にもたれ居て花生に有し梅花を見て申さる、は此梅の花は見事なる花形一ち座の衆中見られたるやとたづね

られしにいつれも立よりてとく見ればまことにほひいろ合めづらしき見事なる花おのく是はついに見も聞もせぬばいくはにて候いか様名有るこ三梅にて候べしと一同に称美しける大臣は則てい主を呼出し此花はいつれより到来せしぞとたづねられし時にていしゆは横手を打て申はさてもく今日はいかなる吉日そや此花を御たづねに付ては長きはなしに御座候へ共御なぐさみに御聞下さるべし様子申上へしと云ければ車大臣を始め皆々も是は一段面白からんはやく花の由来うけたまはりたしとくみになつて聞居たるにこそていしゆも嬉しがはしてはなしけるやうは此梅花はこ元来つくしあんらく寺のとび梅のつぎほにて候へば秘蔵して大事に植そだてられたる人は佐利幸右衛門といへる能書にてしゆせきのしなをいたしていとなみとせられし浪人尤どく身のくらしにて慰に狎狗を一ツ正銅置てうあいし飛梅のつぎほを手入し猶又天神をしんかうし物事しほらしき人跡にて有し故諸方の風雅成人く幸右衛門の宅を遊び所にして寄合色くのたはむれはなしをいたされける内に音曲のはなしふと五音十二調子の事申出されし人有て則こ三幸右衛門はしゆせきの先生なれば知べしと思ひ尋かけられしかば常に師匠顔して居たる事故しらぬ共云がたく急には此事のべかたしとくとし

らべてお咄し申さんとして其湯をば先ッすまし夫れより打捨置れぬ事なれば日比信心なす天満宮に日参し何卒神シ力をもつて五音十二調子を通達ッ仕るやうにさつて給はれとたんせいをぬきんで立願せしに神納受有ての御方便にや一七日の朝飼馴し狎ッ狗幸右衛門裾をくはへ引出す則狗にしたがひ行見れば日参せし天神の宮より一里程わき道に人の通ひなき山中へつれ行爰はつて見よといはぬばかりにかきさがす故あたり」(三)に有ける木の折れをもつてはり見れば一トつの箱をほり出しけり有りがたくもふしきに思ひ直に宿へ持かへり箱より取出せばふくきに包たる一巻の書なり信をとつてひらき読見れば音曲一道の秘密の書にして人の知らぬ音曲呂律の極意を手に取やうに書記したる巻物なり誠に信心肝にめいじいと尊く思ひ夫れより日々工夫をして今此道をしるといへ共元来声業を修行せざるにより心斗高才になって人に伝授する事成がたく其身」(四)にも残念に存じ又々立願なして祈りけるは何卒此道に叶ふ直成人に御引合下さるべしと祈誓有ければ其夜の靈夢に汝が願ふ所尤なりきあらば飛梅の咲し比其梅花の枝を住吉難波屋へ送るべし時至らば此花に心の付者こそかならず浄るり懇望の達人なり則此書をあたへ申べしとの御告と思へばそのまゝ夢はさめ候により御告にまかせ私方へ毎年正月花咲と相送らるゝ故是近年々生おき候て相待候所に今日只今花の由來御尋に付て幸右衛門の身の」(四)上段々かくの通りとはなしかれば皆く寄異の思ひをなせしに大臣は取わけ諸芸威応の人にて是はふしぎの物がたり然は其しゆせきの先生に出合五音十二調子の伝授をうけ末世の芸者の宝となすべし亭主此義いかと申さるれば亭主いよくよろこびつゝ、何か扱年月彼幸右衛門左様の御事を願

相待候へば只今はより迎ひの人を遣し呼寄せ申べきとして其儘かこの用意を申付少しも早く参り候やうにと四枚形にて迎ひを遣し先御祝義の御吸物よ」(五)とお肴よと座中ざゞめき合所へ佐利幸右衛門招きに応じて参りしとしらせに大臣も嬉しさに門に迄迎ひに出られずぐに奥の上座に直し日比浄るりあやつりをすかれ諸芸の至極をこんばうなしける事を語られ今日ふしぎに先生の御事を承りりやく義なれ共是へ御出下されと申入れける所に早速の御入来忝く大慶至極と申さるれば幸右衛門も悦び今日の参会本望の至りとあいさつ有てひみつの一くはん残らず伝授有て左右方へ大願じやう」(五)じゅと手を打て天満宮の方に向ひ御礼の拝をなし酒事なして悦ぶ所へ例年の淨るり評判の連中より使来りて当年は車大臣の年番故追付御出席あるべしとの蝕ッ状至來泉右衛門一ト入いさみ扱合たり叶ふたりかゝる時節に神納受の有し先生の参り会申さるゝ事此芸道のはんじやうなれば当年は此幸右衛門殿を判者として位付を定むべしと思ふはいかにと云るれば皆く是は幸いなり是より直に残らず」(六)会本トへ御出有べしと佐利氏をともしなひいそがれるひとへに天満宮の御方便狗のほり出したりし故年々珍敷しゆかうのたへざるも狗のひびきのちんせつなりと老若男女わんぱく者もおしなへてかんじけるとかや其上当年成のとし是もさいわひ幸右衛門を評判の頭取にて殊に当春は極位の太夫衆三ヶ津へ引別れ御出勤故三極志と題号しきかくく春の大評判となしぬ

明和三年

戊梅見月」(六)

大坂之部 見立 古銭つくし

極上上吉 竹本 嶋太夫

ぢやうぶには上なし大廣ろくしゆ

上上吉 竹本 染太夫

ちいさふても無るいの布泉銭

上上吉 竹本 住太夫

何れの座でも当りを取至和げんほう

上上吉 竹本 綱太夫

こまかにいたさるゝ宣徳つうほう

上上吉 竹本 咲太夫

時に取りての作有治平げんほう

上上 竹本 其太夫

いきほひにひげも有紹熙げんほう」(モナ)

上上 竹本 倉太夫

ちかごろおちよし三正つうほう

上上 竹本 荻太夫

取まはしのよいは政和つうほう

上上 竹本 紀志太夫

しづかな事によい太平つうほう

上上 竹本 万太夫

いづてもこへのかゝる元符つうほう

上上 竹本 七太夫

よい／＼とほめます 承和昌ほう

上上 竹本 伊豫太夫

聞てめでたい 富寿神ほう

巻軸

大上上吉 竹本 鐘太夫

座本のたからとあをぐ仏法そうほう」(モナ)

三味線の部

上上吉 鶴沢 文蔵

手づまよくまはる車念仏銭

上上 竹沢 岸三郎

しゃんとしてきれい隆武つうほう

上上 富沢 勝次郎

さへた音もあり朝鮮つうほう

上上 鶴 沢辰之助

地をよくひらふは景徳けいとくげんほう

上上 大西 文次郎

ゆたかに音のひびく竜鳳りゅうほうつうほう

巻軸

上上吉 鶴 沢 寛 治

みつをながすごとく隆慶りゅうけいつうほう」(八オ)

北堀江御池通二丁目市のかは

竹本 義太夫座

上上吉 竹本 岡 太夫

太入にてはんじやうさせる大泉たいせんじやう

上上吉 竹本 文 太夫

大きにやはらいたり太和たいわつうほう

上上 竹本 三根太夫

めつきりと上りました宋元そうげんつうほう

上上 竹本 組 太夫

いろ／＼の味ひ有リ鏡益にようぎしん神ほう

上上 竹本 狩野太夫

もん句よくかたりわける明道めいどうげんほう」(八オ)

上上 竹本 彦 太夫

せいだしてかたり給へ聖朱しやうしゆげんほう

当正月新替り

の節は竹本ニ出勤 竹本 七 太夫

此御方は口ニ評有

三味線之部

上上 大西 文 吾

ばちおと手づよい大暦たいれきげんほう

上上 鶴 沢 又 吉

だん／＼上りました熙寧きねいげんほう

上上 鶴 沢 宗次郎

女中たちのかんしん有天神つうほう

上 鶴 沢 宇 八

かつかうよくかまへたる崇禎そうていつうほう」(九オ)

京都之部

至

極上上吉

竹本大和掾

五のんかねそなへたる五行たいふ

穴上上吉

竹本春太夫

しごくうつくしいの昌昌げんほう

上上吉

竹本土佐太夫

惣座中なりをしづむる半両錢

上上吉

竹本君太夫

此度の役義おてがら大義つうほう

上上吉

竹太元太夫

引くるんのように立開喜つうほう

上上吉

竹本音太夫

つぎいての大はね天禰つうほう」(九ツ)

上上吉

竹本家太夫

きどりのめいじん至大つうほう

上上

竹本絹太夫

しだいにひやうばんよろし景祐げんほう

上上

竹本八尾太夫

ますくほめます紹定つうほう

上上

竹本袖太夫

あまりやはらぎすぎた元ン和つうほう

上上

竹本筆太夫

しよ人ひいきに思う皇宋つうほう

上上

竹本久太夫

ふし付にはねを折貞觀水ほう

三味線之部」(十オ)

上上吉

野沢吉五郎

こまかにわかる米すじ明イ徳つうほう

上上

鶴沢市太郎

ひやうしのきいた引かた正隆げんほう

上

富沢音五郎

大西富三郎

野沢善三郎

鶴沢乙吉

鶴沢与三

さても其のちニよし泰昌つうほう

惣巻軸

大上上吉

野沢喜八郎

糸にかけてはきめうゑびす銭」(十)

江戸之部

纏上上吉

豊竹駒太夫

一チ座のかしらに立る常平ごしめ

上上吉

豊竹此太夫

まれものと人のよろこぶ五銭

上上吉

竹本紋太夫

座本をつとめてはんしやうする和同開珍

上上吉

豊竹薫太夫

かずくそへてたつとし嘉定つうほう

上上吉

豊竹佐渡太夫

はやい御しゅつせ隆平多いほう

上上吉

竹本村太夫

しぜんとときよう有天聖げんほう」(十一)

上上吉

竹本出雲太夫

しっかりと口中か嘉泰つうほう

上上

豊竹生駒太夫

よく見おほへてゐる洪武つうほう

上上

豊竹八重太夫

あいきやうは一ぶんのとく天福鎮ほう

上上

豊竹喜代太夫

あたらしい御名に開元つうほう

上上

豊竹富太夫

おんせい打ひらいた天啓つうほう

上上

竹本富士太夫

ねばりのつよい祥符つうほう

竹本崎太夫

竹本家太夫」(十二)

竹本町太夫

竹本喜美太夫

竹本阿波太夫

竹本和光

だんくしゅつせ有べし宣和げんほう

上

上上吉

鶴沢名八

肥前

にぎやかにおとのする駒引銭

上上

富沢文次

外記

手あつく仕立た元豊げんほうつうほう

上上

鶴沢仲助

ヒ

小取まはしにきような重熙てうきつうほう

上上

富沢一二

外

だん切きをひ有り端平たんへいげんほう（十二オ）

竹沢冠太郎

外

鶴沢五八

ヒ

竹沢富蔵

ヒ

大西小次郎

外

富沢伴蔵

ヒ

大西兵蔵

外

大西鉄蔵

外

大西五八

外

富沢伊助

外

いつまでも当所（十二オ）いなり銭

上上吉

鶴沢重次郎

ヒ

七字にたへなるだいもく銭

惣巻軸

大上上吉

大西藤蔵

打合すると有がたかる大黒銭（十二ツ）

不出

豊竹肥前掾

座本

不出

薩摩掾外記

座本

後見

大西藤蔵

太夫

竹本紋太夫

竹本政太夫

去秋故人ニ罷成候左ニ記ス

明和二年乙酉七月十日

法号

聲譽雲外宜乾居士

行年五十六歳

（十三オ）

堀江西豊竹座

豊竹伊勢太夫
豊竹信濃太夫
豊竹伊豆太夫
豊竹久米太夫
豊竹淀太夫
豊竹和佐太夫
豊竹津太夫
豊竹津賀太夫
豊竹戸根太夫
豊竹加賀太夫
豊竹植太夫

右衆中ニ而興行有之候追而評差加可申候」(十三)

難有矣

序

書林欲心房浄瑠璃阪のほとりにて一軸を拾い得たりさるにても何人の捨て来たんの敷置て来たんのかあはれ小錢にもなる者なれかしとひらき見ればコハいかに操兩座の大夫衆の評をくはしく「(二)書つきたり是なん吾ためには六韜三略すでに梓にちりばめんハッアありがたし／＼を其まゝにイヨ難有矣と名づけぬるとぞ

とり

の

はる

ひとつなかやの

左 次 兵

しるす」(二)

江戸操兩座大評判

さかい町

▲もくろく

○見立デ百人一首の

豊竹東治座

豊竹新太夫座

詞にて

こじつける事左の如し

上上吉

竹本住太夫

新太夫座

秋の田のかりそめならぬ上りの巻頭

上上吉

竹本筆太夫

同座

しろ木をみればきびしい手取り」(三)

上上吉

豊竹氏太夫

東次座

イヨうち山と人はいふなり

上上吉

豊竹内匠太夫

新太夫座

名は高砂の松蟲眞は誰もかも

上上吉

竹本村太夫

同座

しだり尾のなが／＼しいが切者様

上上吉

竹本百合太夫

同座

うつくしい声があまりてなとか

上上吉 竹本 佐渡太夫 東次座

いつでも評判はよしの、里に

上上吉 竹本 伊勢太夫 同座

山岡のどすは山おろしはげしいかたり口」(三〇)

上上吉 豊竹 町太夫 同座

初下り御当地にながくもがなと

上上吉 竹本 折太夫 同座

場の見物は別して此人を松帆のうらの

上上吉 竹本 関太夫 新太夫座

師匠の風は当世にあふ坂の関太

上上吉 竹本 伊久太夫 同座

道念坊は此人にきつとうつりにけりな

上上吉 竹本 袖太夫 同座

難波へのあしからぬおしたて

上上 竹本 巻太夫 同座

巻のはにきり立のぼる評判」(三〇)

巻軸

上上吉 竹本 嶋太夫 東次座

角力ならだてかいつみ川蟲眞はわきて流る、

三 極 志

▲座 元 之 部

上上吉 豊竹 新太夫 堺 町

新太夫く、と其名はまだき立にけり

▲雲 か ぐ し

上上吉 竹本 音太夫 東次座

門田の稻葉おとなしい芸風

上上吉 竹 伊 勢 寿 楽 同 座

ふりゆくものはとおしまるゝ名人

以 上」(三〇)

江戸操両座大評判

巻 頭

上上吉 竹本 住太夫 新太夫座

〔頭取〕 当時お江戸八千八百八町御存知之おや玉石町三丁目しのしん

道丸や文蔵から評しますどなたもおしやりぶんは〔氏組〕 あると

もく、去年中東次座でおらが眞眞の氏太夫と同座が仕合せ高野の山

で入った故三の切も評判があつた今とりてきの氏太夫を巻頭にしてい

もらいたい〔嶋組〕 おらが正蔵はどこへ直した〔頭取〕 おもくくと

巻軸へ直しました〔音組〕 こちの和介文は〔筆組〕 おこまさんを巻

頭へ出しなをせく〔寿組〕竹伊勢はいん居だから別にした〔四才〕など、いふ趣向であらふ〔頭取〕いづれもがたの思しめしそれ／＼に道理もござりますれど文蔵下られし己後次第に評判よろしく三の切にかけてはひとつもあだやなく〔わる口〕あだやなしとはいわれまいすでに初春のおさな陣取の三の切などはきつい不評まだ二の切の口どりの方がよかった〔ひいき〕此べらぼうめは何をほごく上りの出来がわるくて見物がのみこまぬのじや〔さし出〕出来がわるくても大坂で染太夫がかしたとの大評判はきかぬか〔頭取〕それは口にあふとあわぬとの差別此度千本櫻の三の切はとんとゑらいものうちつゞき狐場は〔さし出〕わしはよいとおもふたが〔角ちと上ひ人でないとしする人がおほい〕〔頭取〕何はともあれたつた一ッ本の先生〔わる口〕あの引幕に連中といふ字が見へましたがどこの連の中から進物したのでござる〔ひいき〕大仏程の幕だからわざと連中と書たのだは〔頭取〕それは太夫のしつた事ではござらぬまづは申ぶんなき巻頭様く

上上吉

豊竹氏 太夫 東次座

〔頭取〕近年のほり出しもの声がらはよしよふ上手に取りまわす人とかく蟲眞はありがたいもの次第／＼に立身殊にかるかやの山場では小判の山をついたとうのはさ東治座のふくの神てんと天満や清五郎きつものになられた〔女中出て〕「五三こちの筆さんがしろ木やのお手がらおと、しから去年迄おし通しての評判はきのふやけふの事かいのふそれに氏さんをさきへ出さんすとはそりやきこへませぬ頭取さん〔頭取〕サアこ、が互角こかくのむつかしい湯それゆへもくろ

くには筆太をさきへ直しました〔大ぜい〕これは尤く〔さし出〕氏太夫評判はよいけれどいかにも声がひくうて小札場へは通らぬ今のわかさに声をおしむ事はないはり上てく〔ひいき〕さるまつめなにをぬかす大場をつとめるものはおもふ様には声もつかわれぬはヤイそんなむだは四国へでもいってぬかし〔五ツ〕おれ〔頭取〕去春忠臣蔵の九段目よりかるかやの山場末の名残浄瑠りとて女護鳴迄あだやなき大当り大入り〔わる口〕俊寛はさほどかんしんもせなんだあれもかるかやの山のひゞきで入ったものまだわかいところかござるぞやそして名残を語ってまた居なりとは見物をつまんだのか〔頭取〕そこが手がら必竟江戸中打そろふてひるきゆへ芝居でもたつて留めたと見へました当年はとなりは新浄瑠りと申道具は名におふ新右衛門なれば〔六三きれいなり勿論太夫もつわもの五枚に手ずりは文吾文蔵といふ所然るを鳴太とこの人々にてくりかへしの千軒長者隣は二月八日より千本櫻にとりかへしなればひるきある芝居とは申ながら鶏場もひやうばんよろしく大悦く

上上吉

竹本筆 太夫 新太夫座

〔頭取〕今で名高き岩附町の先生〔ひいき〕まぢかねた油屋の佐介さんてつきり巻頭とおもひの外〔わる口〕そりやむだといふもの三の切も出来ぬ太夫をなんで巻頭へ直すものじや〔ひいき〕あの丈八めを引〔六三きりだせあたり出すときびしいは此人慶子が道成寺ときてゐる〔旁から〕そうだ／＼二年ごしにあてつめたおこま歌舞妓でもしたゆへ黄八丈は直があがり初午や天王のあندوقの地口も大かたは才三さん禪門のてらまいりの道すがらも樽ひろいの口ずさみ

も朝からばんまで耳について居るあんなきびしい事が又とあるふか
イヤハヤおもしろかつたおもひ出しててもくびすちもとからじはく
くくく **りくつ者** 何ほどじわくしてもほんまな義太夫ぶしと
はきこへぬといづ **せ** しかたでも由ぞやむかし成仏といふめくら法
師が平家をかたり出した其めくらが声がしわがれたゆへ今も平家を
かたるものその声をうつし来れるとつれく草などにも書たり当時
昔八丈をかたるものみな声のよき人もあじに小音にこしらへて詞
はとんと小言をいふやうな **頭取** そんなむだは御無用いかにも筆
太夫ちと声が不足にござるゆへふしもこんな人がちと相見へますな
れとせんたいが切者大の手とりでござるのとくと工夫あらばあつはれ
の三 **せ** 切と存らるゝはこの人

上上吉

豊竹 内匠太夫

新太夫座

頭取 ゑびすやの久四郎去年初めて下られてより何ひとつわるいといふ評判なくやわらかなおもしろい事 **上方者** そりやしれた事はて内匠太夫と改名する人じやもの又此跡の小さいの浄留り此人で持たサハリのあんばい又外にかたりてのなきいれなものじゃ氏太より先へ置てもよい筈 **頭取** 当春のおきな陣取も此人の評判はよろしく別して千本櫻の四の中は一の大出衆とて猫も構へも **へ** せかんしんく **りくつ者** これ頭取猫は土手かはうらでも聞にゆかふが杓子とはとうた **さし出** 杓子は弁当箱についてくるは **大ぜい** そんなふい落しはなしをやめにして村太の芸許く

上上吉

竹本 村太夫

新太夫座

難有 矣

功者 いつても功者昇で三の切が出来ると外にはないのじゃ今での親仁株は此人く **ひいき** 三の切は過しかんりうを聞ぬか二軒の大勢を引うけて夏まで入通した大先生 **華取** さやうてござる此うへのよくにははじのひろい声があつたらたまるものじゃござるまい **へ** **る** **口** 上るりは上三であらふが扱もながい冬の日にはちとときやくしてたのみます **頭取** ながいもあればみちかいもとやら由て太夫たちのうちにもいろくがござります過ぎ矢口の道行よふふしがつきました **る** **口** あれもしまいの歌謡でとめるとよかつたちとながかつたぞやおきな陣取の二切はねっからきこへんなた **頭取** あればむりな役わりさるによつて百合太夫とかはりました此度千本の三の中はいかふ見物がうけとりました

上上吉

竹本 百合太夫

新太夫座

頭取 さても達者な人下りとうざは **へ** せめくりの鬼のやうにきびしい評判少しちかころはめいりて気のどくまづは第一声かよし **る** **口** 声はよいようなおなじふし斗りかたるひとどうやらもるやうなが聞にくひ **頭取** せんたいつつこんでかたられますから少々は耳たつ所もござらふ何にもせよ一たい達者ゆへ何をあてがふてもきづかいなき人なれどもこの度は太夫五枚ゆへちと役廻りおもはしからずきのどくに存ずるしかながら大夫でのやぐら下イヨ富田やの **へ** 庄次サン

上上吉

竹本 伊勢太夫

東次座

佐津組

頭取こりやどうだなせ佐津太より先へ出した **頭取** も

くろくには佐渡を先へ直しました〔大せい〕芸評く〔頭取〕めき
くく仕上たは左内町の清左衛門三代目の伊勢太夫といはれるほど
はござるぞ〔わる口〕したがあんまりひねくる様で聞にくいもそつ
とさっぱりとやつてもらをふ〔頭取〕そこでござる浄留理といふも
のがかるはづみにはかたられぬもの場と趣向によつてかろくも
千々おもくもなるものされば今度千軒長者の役場はつっこんでよく
どすにかたられる全駄おもしろい事く

上上

竹本 佐渡太夫

東次座

〔頭取〕このたび千軒長者の序切出来ました〔わる口〕とんだした
るいこじつけなかりようじや〔さし出〕うれへなどはあじなく
せのある浄るり〔ひいき〕それはおのれが浄瑠りをしらぬからじや
あのやうにいっぱいにかたらくものではない〔頭取〕いかにもさ
やうくなんぞ大やくをうけとりてかたらば猶評判が「千々高うな
りませう

上上

豊竹町 太夫

東次座

〔頭取〕当春の初ッ下りひやうはんあしからす声からもよきゆへだ
んく功者にならるへし〔さし出〕このころは氏太夫少不快たとて
粟のたんなども此人かかたるかよはと氏太夫のとをまねるときゆ
る〔頭取〕こゝで皆様へ申すもくろくは半歌仙にて十八人と定め
ましたれは名ある太夫のもれましたもあるへしそれは後編にてくわ
しく評ませふ

上上

竹本 折太夫

東次座

〔きやん組〕まちかねた長兵衛いつても人のうれしがる先生ちやり
の「千々」親玉はかにはあるまい〔幾組〕まだあるくくこんく
くやわらかなちやりはおらが幾田やそれを置て外にはないととはそ
れはあんまりおとよくさまよ〔頭取〕何はともあれ名にふれた一方
のつわもの〔わる口〕上るりかわかりかねるにはこまつたものいき
みんにんちくもとつと聞あきた〔頭取〕イエくあのやうにおもひ
きつて入事もならぬもの一たい浄留りにまつつくな所かこさるあい
けう男

上上

竹本 関太夫

新太夫座

〔女中出て〕筆さんと一所に居なんす程「千々」あつてよふ似せさ
んす声なら男ふりならたつふりと汁けのおほひ喰力のある御方しや
わな〔頭取〕もしこゝは上るりの評てこさる去春はしめての下り首
尾よくめてたし次第にひいきもまして珍重く

上上

竹本 伊久太夫

新太夫座

〔頭取〕竹いせ寿楽門人じやとの事ちやりのこんたんし当時やはら
かなところはかに中洲のいゝたや追てゆるくくと評ませふ

上上

竹本 袖太夫

新太夫座

〔頭取〕とはしいへきの藤七まづは「千々」一たい出かよいゆへた
んく上達でめでたしちと上るりをかむようなと申人もこさるぞや

上上 竹本巻太夫 新太夫座

〔頭取〕 たん／＼と出情ゆへいかふ上達いたしたおさな陣取の三の口はうけとりました

巻軸

上上吉 竹本嶋太夫 東次座

〔頭取〕 お馴染御ひいきの和佐太夫去春先生より名をもらひうけれ嶋太夫とはあつはれな面目めてたふ打ませふシャン／＼〔女中〕 こちの正蔵さんまちかねやした過し春の名びろふのことぶき万歳嶋台はきひ〔十三〕しいものでござんしたイヨ幾竹さん〔頭取〕 まこと上るりのせうねがたしく申ぶんはこしらぬよって巻軸へ直しました〔わる口〕 申ぶんはないとはちとひいきてあらふあれほどはやったお胸の上りに嶋太夫が場をかたる人は一人もない〔ひいき〕 そりやそのはつ一たいが本シの上るりゆへまねもしにくいへらくと柔にかたるしろ木やなどは口ぢかいからやりばなしに人かうなるのた〔頭取〕 何と申ても上るりのすちかたゞしく其上きれいな事でござります〔大川ばた〕 そしてつき〔十三〕あいのひろい人太夫中の通りもんだ〔さし出〕 しん道の一らい法師は評判がよくておよろこひ〔頭取〕 それを太夫のしった事でござるか〔さし出〕 色事もちとひかへられたらよかるふ〔頭取〕 それか上るりの評判にいりますか〔功者〕 何はともあれ當時うれへでなけるのは住太とこの人二人より外はない〔ひいき〕 三のきり／＼〔旁から〕 三勝といふ処がきゝとござる

難有矣

▲座元之部 豊竹新太夫 座元

上上吉 豊竹新太夫 座元

〔頭取〕 はたこ代地松屋十兵衛七ツの〔十三〕としより上るりにかり古新太夫門人七太夫まづは師匠の影とて去々年より座元株めでたし〔わる口〕 新太夫の名はとつとはやい／＼〔頭取〕 何を申ても当年十九とやらしかし功者なかり口ゆく／＼は名をあぐべしと末たのもし今度千本は評判よろしく〔さし出〕 かしらの新右衛門さん道具から手すり近いと申やす〔頭取〕 まづははんじやうにてめでたし節句より本町式丁めの糸屋のむすめとやらいふ新上るりよく出来たげなどのうはさ〔十四〕あいう／＼と大入を待ます

▲雲がくし

上上吉 竹本音太夫 東次座

〔頭取〕 ふくとくいなりの大津や和介とは江町式丁目の竹いせとの両先生は源氏伝受の雲かぐしとおとなしやかに別に評します和介去秋より休み殊の外見物が恋しがられましたまことに惣太夫衆の内にて古風にたゞしく又声にとりては古今未曾有の大先生〔旁から〕 此人が文弥でもかたり出さるゝと惣身がしひれる〔十四〕やうなありがたい／＼〔ひいき〕 一たいすなはな風義まことに座鋪上るり此上もなきかたりやう夫ゆへちと場へおちかねますれど大和太掾うたがいなし〔頭取〕 どふいふても今での親仁株過し雪の段のごとき大当りをまわす／＼

上上吉 竹伊勢寿楽 東次座

〔頭取〕さて隠居でござりますまへかたならば天晴の巻頭がもの

はござらふなれど今はかくれ居る名にあわせて雲がくしといふ座

〔ひいき〕それ」(十五)でも声あんばいはむかしにかはらぬきつい

おやち巻頭へ直してよからふ

〔頭取〕サそこが隠居でござればわか

とのばらとあらそひてさきをかけんもおとなげなしそこで惣太夫の

くゝりにいたした

〔わる口〕なにかめったにあがめる声は少々かは

らいでもはやむかし上るりでさへぬく

〔頭取〕そこでござる全

躰上るりのもとが謡でござれば己前は若イ男もむすめもば、様も同

し声色で一たいが古風な井上はりまふし加太夫」(十五)ぶしからと

ってきた義太夫ぶしたとへ当風にむかずともくとおき、なされま

たもつともなところがござりますおもしろの一ふし

げにや竹本尊竹の

未葉さかふる

春のめでたさ

安永六酉三月

両国やけんほり

川村弥兵衛板

江戸操両座大評判終

闇の磔

浄瑠璃
操評判

闇の磔

上の巻

大序のかゝりは

政道を乱す

王子の反逆

二つ目の仕組は

忠臣を隠す

春霞の覆（二オ）

三つ目の身がはりは

我子の命で親の名も

染上る親王の隠れ家

闇の磔

四つ目の道具は

三根から麓へ

一面の八重桜

五つ目のくゝりは

朝敵亡びて

治った此御代（三ツ）

見立浄瑠璃外題による事左のごとし

惣巻首

至極上上吉 吉田文三郎

芸道は名に高き富士見西行

至極上上吉 霧澤文蔵

音色には鬼神も感ぜしむ名歌勝閑

浄瑠璃之部

大上上吉 竹本染太夫

見れば見るほど手ごもった極彩色ごくさいしき

太上上吉 豊竹此太夫

先師せんしの恩おんを立通たてす義臣ぎしん兜かぶと

上上吉 竹本政太夫

おいしい事は何所どこへ往いても三日た日い太平記へいぎ

上上吉 豊竹麓太夫

けっかうな声はどこ迄も融大とをるのおと臣と

上上吉 竹本男徳齋

ちやり場は急度当ります矢口渡やぐちのわた

上上吉 竹本組太夫

ずかくと上りめの見ゆる手習鑑てならひかみ

上上吉 竹本三根太夫

聞しめるとしつかりとした昔八丈むかし太夫でう

上上吉 豊竹八重太夫

口中はさてもよふ廻る車海道くるまかいどう

上上吉 豊竹駒太夫

語り出しは花やかな江戸紫むらさき

上上吉 竹本咲太夫

どこやらが大将の芋文談なまはへおんだん「ニウ」

上上吉 竹本梶太夫

いづぞやから御姿を見せぬ隠井戸かくれるぞ

上上吉 豊竹時太夫

一トいきとはねいりました入相花王いりあいざくわ

上上吉 豊竹頼太夫

ずっと聞のおそろしい皿屋舗さらやしき

上上吉 豊竹源太夫

黒人くろとより素人受の瓊しろうと在鱗げんまいろうこ

上上吉 竹太弥太夫

語りやうは突出した兵庫岬つき
ひやうごのみさき

上上吉 竹本文字太夫

声がらはちとかた過る金年越こがねとしし

上上吉 竹本是太夫

小つぶてもからいは三莊太夫さんせう「ニウ」

上上吉 竹本中太夫

詞にしり声のない鶯塚あぐのすづか

上上吉 竹本錦太夫

師の名をゆすり受た二代鑑かづみ

上上吉 豊竹磯太夫

御出世を今やくと松浦登まつらきぬかみ

一上 竹本芳太夫 一上 豊竹信太夫

一上 竹本沢太夫 一上 豊竹繁太夫

一上 竹本葉太夫 一上 豊竹浅太夫

一上 竹本名太夫 一上 豊竹武太夫

一上 竹本律太夫 一上 豊竹要太夫

一上 竹本出水太夫 一上 豊竹湊太夫

巻軸

功上上吉 竹本春太夫

いつきいてもはんなりとした蘭奢待らんじやたい「(三ツ)

三味線之部

大上上吉 鶴沢寛治

和らかさは御家流の仮名手本かなてほん

闇の隙

大上上吉 鶴沢市太郎

ほんに口だけの事は在原景図ありはらけいず

上上吉 鶴沢名八

手ざはりはしんなりとした京羽二重はぶたへ

上上吉 竹沢弥七

音しめと器用は雲泥な檻樓錦うんでいづつれのにしき

上上吉 鶴沢鬼市

尖さは又とない布引滝すざと

上上吉 鶴沢三二

かけ声はさわがしき夏祭なつまつり「(四ツ)

上上吉 鶴沢重三郎

さはりを西へきりかへた国性爺こくせいや

上上吉 鶴沢伊八

紙治はあたりました那須与市なすの

上上吉 鶴沢甚蔵

弾かたは何のくせなき昔嘶むかしばなし

上上吉 鶴沢龜次郎

流義をどちらへも分ぬ源平脚闘つづし

上上吉 鶴 沢 寛 三

いさぎよけれとちとさはがしいくつはかしま 轡鑑

上上吉 冨 沢 藤 次 郎

どこやらにかたみのある大峯おほみねざくら 桜

上上吉 鶴 沢 正 蔵

次第に舎兄をうつす伊豆院宣いつるんせん〔四ツ〕

一上 鶴 沢 定 吉 一上 大西喜太郎

一上 鶴 沢 熊 蔵 一上 大西菊松

一上 鶴 沢 嘉 蔵 一上 竹 沢 惣 七

一上 鶴 沢 右 蔵 一上 竹 沢 駒 吉

一上 鶴 沢 吉 治 一上 鶴 沢 亥 蔵

巻軸

上上吉 野 沢 喜 八 郎

花はあれど実が少しうす雪物語

人 形 之 部

次上上吉 吉 田 冠 蔵

丈夫さは類ひなき万代ばんだいのいしすへ 礎

次上上吉 吉 田 才 治

誰にてもマア惚させる恋女房こひにようぼう

上上吉 桐 竹 門 蔵

いつの間にかうハ仕上た千両のほり 轡〔五ツ〕

上上吉 豊 松 重 五 郎

和らかでしつかりとした女くすのき 櫛

上上吉 若 竹 友 五 郎

遣ひかたの手きびしい武勇問答ぶゆうもんだう

上上吉 豊 松 元 五 郎

どふいふても此芝居での信仰記しんかうき

上上吉 吉 田 文 蔵

気持はひくからぬ九重ここのへにしき 錦

上上吉 豊 松 東 十 郎

御舎兄と別れてござる有髪うはつのはなむこ 姫

上上吉 吉 田 真 吾

上上吉 吉 田 磯 五 郎

先生そでかぢみの風俗がよふうつる袖鑑〔五ツ〕

上上吉

吉田音五郎

大場な仕出しは奥のしれぬ千疊敷てうしき

上上吉

吉田才藏

どこやらに舎兄の佛を近宣かるかや

上上吉

若竹武十郎

近年はちと色のうせた龜山姥こもやうは

上上吉

吉田三吾

見るから好もしい振袖始かりそのはしまり

上上吉

吉田虎藏

いつの間にやらめきくと出世奴いづつせやつこ

上上吉

藤井大吉

あたし事は尻のすはらぬ出入湊みはと

上上吉

吉田音藏

そろくくと出世の見ゆる旭車あまひのくるま「六才」

上上吉

若竹林三郎

どふそと立身をあふぎ立る扇手あふぎの

上上吉

豊松國八

いつ見ても当番入いるかのたいしん入度大臣

闇の隙

上上吉

豊松弥三郎

今ぞ師の名を名のる世継梅よしまのわめ

一上

浅井門二

一上 吉田清七

一上

辰松文十郎

一上 吉田民藏

一上

田中平次郎

一上 若竹伊藏

一上

土佐幸助

一上 吉田太吉

一上

若竹栄藏

一上 吉田貫次郎

一上

吉田千四

一上 吉田十七吉

卷軸

功上上吉

桐竹門三郎

ゆつたりと三丈夫な難波丸なにはまる「六才」

惣 卷 軸

極上上吉

豊竹嶋太夫

誰がどふいふても此道たにの一谷

当時不聞分位付予斯のごとし

上上吉

竹本住太夫

上上吉

竹本紋太夫

上上吉

竹本筆太夫

上上吉

豊竹氏 太夫

上上吉

竹本音 太夫

太上上吉

形人 吉田 文 吾

各人々御疎遠ゆへ評を略す追付御上りの節ゆるく評
したしませう」(七オ)

聞に礫は向ふの見へぬ靈魂の示

抑 難波津浅香山の言の葉は人の心を和らけ男女夫婦の媒にもと
聞しに當時は人の心せはしく先それよりは目前見へわたりの戲湯に
しくはあらじと夫浄るりは勧善懲惡を示し歌舞妓もこれにひとしく
忠孝をもて人を導くの種なんと得手勝手我儂了簡芝居好の友二三
輩打つれ道頓ほりの辺よりそこ爰と尋廻りつ、法善寺ニさしかり
先本堂に詣それより片辺なる某店に腰うちかけふりくゆちす其内
かたはらの石塔ニツ動くと見へしかふしきや煙氣の内よりも怪しき
姿顯れ出我はこれ播磨文三が靈魂なりたのもしや旁いづれも芝居好
たまふ其随縁に引されつ、是まで顯れ出たるなりと聞より人く大
におそれさてく思ひよらざる性靈かな其靈魂はわれくにいかな
る事の恨か仇かとおどろきさはぎければ二靈魂をはらくとな
がしこはけしからぬ人くのおとろきさためて左様と存せしゆへ鳴
ものなしに出たるなり全以て「モウ各に恨も仇も夏草のしげみに迷
ふ我くなれど亡き跡迄の心遣ひ近代撰二芝居や、ともすれば色を

うしなひそこよこ、よとかけ廻り或は旅行キ京上り其上一日切り落
しどこが西やら東やら是みな芸の未熟からそれになんぞや歌舞伎の
世じや浄るりの末など、我身の下手はしりもせて色くとの迷懷尚
此上も覺束なし當時の若きもの共へはげみを付ん其為に兼て一ツ書
をした、め置好士を待事良久しけふ幸に各方へ頼置事は一ツと一書
を残し二靈共書消ことくなりけり人く奇異の思ひをなし是はふ
しきの事共也いかなる事の書しやらんと聞き見れば當時の浄るり操
三味線それくに劔を付し位付おもしろしく我々もとより此道に
志ある其上二靈の頼もたしがたしこれより直に浮瀬にて我々に等し
き好士をあつめ当細評をもよふさんと巽の方へそこ、ろざし足をは
やめていそぎぬ

安永十ヲ

作者

丑の 孟春

而 笑」(八オ)

惣 卷 頭

至極上上吉

吉田 文 三郎

至極上上吉

鶴 澤 文 蔵

頭取 先もつて各様方はやぐと御入来下さりまして大慶に存申
ます誠に先年浄るり発行之節は毎度評判所の会合もござりましたれ
どいかゝいたした事か近年浄るり評判打たへましたるゆへ此度浄る
り三收人形それく位付甲乙を此席にて評いたします各様方思召

もござらば御遠慮なう仰聞られませう」大ぜい「おもしろいぞくまづ巻頭は誰じやく」頭取「誰と申たらいま日の本にかくれなき吉田文三郎丈鶴沢文蔵丈此兩人はいづれをいつれ共分かたき」稀ものゆへ至極上々吉のつり合にして惣巻首に居ました」ヒイキ「或程これは尤なれど今少し位が不足な様に思はる、此席へ出る事しやなけれど歌舞伎の評では慶子を大至極の位じやないかそれにくらべて見れば兩人ともに大々至極くらいに仕ても大事有、まいぞや」頭取「左様思召も聞へましたれとそれは歌舞伎と操との違もござりますか」歌舞伎は花を面と仕殊に例年品定もござればかりことの出来不出来にて座列位付の不同もござりますゆへ候これにて御用捨下さりませ」ヒイキ「頭取も其所を承知ならば毎年評してもそつと位を上てもらをぞや」惣々「講尺がすんだらきりく評にか、つて下んせ」頭取「左様ならば先目錄の通りから申ませう扱二代の開山」千吉「吉田冠子丈此人若年の節菅原の時菅秀才のお役其御親父不快にて御引被成かはり役松王女房の役御勤にての大出来漸く此時分よりかゝる大役を勤出かされし所定で後々にはと思ひしに違はす今はたしかく無類の名人とはなられき誠に蛇は一寸にしてとは此事ならし近き比新地にて染丈興行の節反魂香に又平みやの二やく国性爺にては甘輝のお役いづれも大出来」見功者「みやの役目は中々一トむきのやり人とは見へずきつと將監の娘とは承知仕ました鏡の性根も受ました甘輝は只何となく希代の軍師と見へたぞ」頭取「次のかはり恋女房にて定之進重の井の二やくいづれもけしからぬ出来様十段めうれいの間式台より思はず落たる遣ひ方きりと新しい急度」千吉「御工夫」さじきより「次のかはり布引にて小

万実盛の二やく当りました実盛にて太郎吉の鼻かんでやる性根ちと見物におかしみか、りうつとしい様にも有、れど小万の男仕立は受取たぞ二、切にて思はず飛上る仕内味事く、切に紙治にゑさん孫右衛門の二やく別而孫右衛門は大出来一ツは此人で当りました」頭取「其続き龜山廨に石井源藏おし、祐軒の三やくいづれも出来ました次に三日太平記切、おはつ徳兵衛三日にておさま、武智の二やくハッめ馬に引ずられての大切新しうござりますおさまは花やか、切にては則おはつのやく別而下の巻平野やの場門口よりさしのぞく所殊に人形に錦をきせながら頭の遣ひあんばいといふもいへませぬ其次見取浄るり女護鳴にて千鳥ひらかなにて梅がへの二やく」ワル「千鳥のやく奥にて扇を上て招く」千一「時大きな声でチヨトおかしはあまり仰山な事」頭取「しかし梅がへはどふも、此場にて雪をふらせし趣向きりとは案者、火燵の間の遣ひ方など新しい事とも多く面白いこととお前と一ツ体といふ文句の間協身しての所はきつい性根明々の年うす雪にて大膽のやくしごと事きつと憎う見へました大切四季所作事は大出来此上もなけれど染の問ちとさびしくて湯の受がいかがしくなれど仙人谷はきつと承知殊うす雪清水湯の趣向は此お人の御工夫のよし花やかな事、それよりいかゞした事や御退座にてしばらく御休どふした事と思ふておりました所南へ御出勤にて応神天王の勤作男鑑らいでん門女房などいづれも申分なき出来明々の年姫小松俊寛およねいやは違ふたもの其後又々御退座にて兵庫の方へ御越との事兵庫にて由良助みや又平」千一「なと大当りと承りましたそれより京都へ御上り薬師にて娘道成寺諸人の目をおどろかし今にては誓願寺御勤との事いづくへ御出

被成ても此人の沙汰斗は誰が点の打人はないぞとふ見ても操の開山親王とはたが名付けん花も実もうち揃ふた名人かなといづくの浦でも此噂〔粹連〕いつぞや梅幸由良之助にて大当りは諸人のしる所其後此人右梅幸にもれたる穴を遣はれし時は此方ども、ほん得心で有ッたぞ其外何役でも此人の遣ひ方はいかな慶子梅幸由男眠子などの名人達も此人の形を捨られぬ所を見ては誠にまれもの惣体の芸頭といふても過りはないぞ〔見功者〕故人綱太夫近此の上手とはいひながらひとつは此人の引廻し蘭奢待の可兵衛は奇妙く、ひとり淨るりが語られそふに思はれた是に限らず〔エラウ〕人形にて節付の差図など仕らるゝとは余人の及ばぬ所其外かはり毎に古物でも新物にしてのつかい方は発明く〔頭取〕其外奇妙は数も限らず思ひ出してはめ出したら幾日申ても尽す夜も更ますれば先これぎりて次へかかりませう

〔頭取〕 さてこれよりは彼老人近代の元、祖鶴沢文蔵丈此人鶴沢友治丈門人にて幼年之頃より竹本義太夫芝居へ御出勤次第の上り目先三味の音色さのみ飛ぬけたと申はどの事なけれど只何となく大々く音に品々有てきれいに手は左右共に打揃ふた達者どこに一ッ申分なき大立者弾方はきつすいの西流なれども才芸なれば自己の流義を調合しての弾あんばいどふ聞ても希代の妙手殊に手を付る事奇妙にて其上歌の方にもくはしきや全〔エラウ〕体地の間などにも歌の弾方まゝあつていよく艶に何を聞ても穴とやらはひとつもなき名人此度時代線ハッ目いづもながら目さましい事一ッ体どころとらまへた所はなけれど始終に味之有ッてどふもいへませぬ〔湯より〕ハハハットといふ文句の時たつた一ツた、かれた折は種が嶋かと

思ふた〔けいこや〕何より歌の間只しめやかにどふも申様がない程の事〔法師〕花袋を入れたは作者のはつめいなれど弾方は受てゐるぞ〔頭取〕全〔体大西藤蔵丈存〕命の内より故政丈の役目を渡されしとの事うぶからが大将の徳のそなはりしお人近比新地にて国姓爺相の山の時はしばらく御勤なくかはり役鬼市丈にて半ば迄過しが其後御出勤さりととは二ツともおもしろい事〔エラウ〕聞じまん一相の山にて山三〔しゅうつくばい〕述懐の間と染太もよく語られしなれど弾方の工合はきやうとい事く〔頭取〕其後紙治にて下の巻衣裳庄しの間の手さりととはよふ付いた物次に龜山四ッ目刀屋の場相かはらぬおもしろさ〔けいこや〕一切の大落しの時扇ばりにひかれた所はきつもの自然とたまつてゐられぬ所次におはつ徳兵衛上の巻かゝりの道行の間門口へかゝる迄只夢ともなうつゝともなき手の付あんばい自由な物ではあるぞぬいものゝ間のめりやす拍子ぬけのした様なる弾方は性根奥のさはりなども撥はなれの奇麗〔きれい〕させんたい此人のさはりの切ッやうは誰も得合点いたさぬ一をつまらせて二のさへた所は三味せんやも不思議なとの事其外の弾方〔エラウ〕おくり返しから余人のとは真はら皆品をわけての一流似せとふても似せられぬすねた弾方は叶わぬく〔頭取〕其後女護嶋の御役これは前方綱丈と御門人亦丈との改正章句にて大当りゆへとか付替るもいかしがしく定てお氣にすゝまぬ事と存じた〔ワル口〕口の成程物語の間さりととは不性な事〔頭取〕其後うす雪大塔宮胥庚申など其外さまゝ何でもよく承知したものの取ッわけてもみちがり曲水の場は古今無類との評判いやまたけしからぬ大当り全く此お人の御働内町のけいこや衆中もこれにはほとんど難義しられたと見へました〔けいこや〕もみぢ狩は鐘

入と梳久と三幅対にしておかねばならぬ代。物其外古物は何を尋てもしらぬといふ事なく故人」(十四) 鐘太丈も大将とは申物の一ツは此人の軍配ゆへか東にてはさのみ残た物多からねど西へ御出勤にて此人と出会以後一ツとしてあだな事なく何でも残ッて有所は全く陰陽和合の所かも其余妹背山など初段より切込大方此お人の御世話けしからぬ勲功二君に仕へず竹本之芝居を放れぬ所は誠に芸道の桶鳴呼忠臣とは世の人のしる所「聞しまん」取程少しもいひ分なき立者なれとあまりかたくりしい様に存る落のくる事がきらいといふ弾方に思はるゝが何芸でも愛といふ事も有ゝはやはりちと落取々様にも弾給へ「頭取」どちらからどふ見ても大立者に違ひはござりませぬよし穴を申人は有共それはひつきやう偏執と申物何ッでも此芸一まきにかけてはおそらく四海に一句も上る者は有まい感ずるに余りある大将」(十四)

浄留利
操評判

闇の磔 中の巻

浄瑠璃の部

大上上吉 竹本染太夫

「春組」今での親玉春太はどふするのじや「此組」当時世話かたりの開山此太夫を出してもらを「政組」こちのはどふじや置キなをせく「頭取」いつも様まづく御待下され御三人共にいづれをいづれとわけがたき名家なれどまづ御当地中興のわざもの染丈ことに

闇の磔

ひいきさかの利ものゆへ何かなしに先巻首に居ました「ワルロ」利ものかしらぬか声はちいさしうれいはきかす詞は親仁も娘も」(二) ひとつの様ながそれでも大将とやらいふものか「ヒイキ」此わろは浄るりの評義をしらぬそふな声はちいさい様でも箇ふとくうれいもきかぬ様なれと物によつてはかんのいをながさず事此人の妙なに先壇の浦三の切鯉の場などこれうれしいの骨肉にて自然と袖をひたすの工合又はおせきのるけん湯大安寺治郎右衛門ひとりごとのうれいなときとこたへましたこゝらが余人のうれしいとは利所がちがふてある先此席へ出て一ト言もいひたくばこゝらをとくとかながへていはしやれ詞はいにしへの播磨殿の流義にてさのみ男女をわけぬが先師よりの伝来古人達の風俗捨ずして用ひらるゝ所きつと承知してゐます「ワルロ」そんなら鼻かむのも古人からの伝来」(三) かしらぬ「ヒイキ」素人なら素人の様にだまッて居やいの「頭取」先々しづまり下され扱これより評いたしませう此人そのかみ小野道風の時初床にて三ノ中と道行のツレのお役目初てより当りをとられ其後かはり毎にいつとも受よく家太夫と一ツ所に出られたれどまたく内に誰れもかれも打こへての上達ッ今に相かはらぬ御名人此度時代織ハ目翠歌の場さりとはおもしろい事只なんくせなくおとなしき語り口どふもく何かさし置ひんよくうれいもこもり歌はお家ながらも妙有ッて聞あかずふし付もちとこまかな様なれど無理なく只さらく語らるゝあんなばいいやはや外々いらい人はござりませぬ「さききより」或はど歌はいつともおもしろい法師衆中もほめてゐらるゝ白無垢に着かへて悦ひ身がはりと」(三) 聞てびっくりしてのうれいなどとかくそゝけす語らるゝ所はきつとおもしろかった

〔頭取〕 始終落付た所はどふもく新地興行の内もおはつなどは感^{かん}心古ものでも相の山宵庚申安達原など又々格別な事でござりましたで、よいぞや 聞しまん しかし此場にあまりはでもいらぬものかい近此の出来は京土産で有たぞきりとはいとお上手 〔頭取〕 いか様左様でござります 一体何を語られても申分のない立者殊に文蔵丈といふ大將が付てゐるればよいと申も無理ならず折々には今少しむかしがった語り口もござれとおもしろい事は外につゞくものはござりませぬ 〔ワル口〕 頭取のやうにいひ立たら何一ツ不足はないがかわい子には旅とやらいへばちと折には旅もさして見やいの 〔頭取〕 何と 〔三〕いふてもこれはど湯数残した人もござらぬどふいふても竹本の礎素人衆の守り神とは此人今での親玉く

六上上吉

豊竹 此太夫

〔頭取〕 扱御待かね此丈この所へ出られましたみなさま申分はござりますまい 〔政組〕 此方共は外の太夫はいらぬ塩町が早ふ出してほしいぞ 〔頭取〕 先もってお染以采相つゞきての興行昔にかはらぬ御はんじゃうは全く此人の御手柄と申物 〔ワル口〕 御手柄かしらぬがさのみ残つたものもないぞや ヒイキ アンナ助四郎にかまはずと早ふ評が聞たい 〔頭取〕 此度白石嘶六ッ目茶や湯随分古代なる語り口さしてむつかしきふし付もなく詞をおもにかたたる、口中あんばいどふもく殊になまりなどは余人の 〔三〕およばぬ所いや又御手にいったものといかなものもかんじております 〔ワル口〕 とてもこのにあのなまりでお文様が聞たい 〔頭取〕 とうざい 扱それよ

りいけんのあいだちと長いやうなれど詞のつめ合持前ながら味い事く切掛合少しなれど御苦勞此跡の墨染桜三だん目などもきつとおもしろうござりました全体世話事にかけては此人其外いつぞやの合邦辻などはいらい人はないぞ古物でも蝶々ハッ目極彩色天王寺村などけしからぬ出来又平などはかくべつなもの吃の工合は此人につゞくものはござりませぬしかし御心勞のかけんかよほとお声がひくうになりました何にもせよたるみを見せず撃て行るゝは此人の軍配の上手まづは重畳く 〔三〕

上上吉

竹本 政太夫

〔麓組〕 こちの声大將はとふじやい 〔頭取〕 されば麓丈今での声頭なれど又々政丈味みにかけては此席とぞんじられます誠に去秋より京都の御つとめことに受よきとの事先は珍重く 〔三〕坂の内も南芝居興行相つゞいたはんじやうの所いかなる事が御上京 〔ワル口〕 めづらしくもない頭取の口上此人の異名を箒太夫といふが貴様しらぬかい 〔頭取〕 又わる口仰られます当地にて紙治は乳母にだかれた子迄が申程の事其次亀山二ッ目六ッ目ともこれも相かはらぬ大出来 〔北辺〕 次のおはつ下の巻これも大当りか 〔頭取〕 これはちとはつきりめかずそれよりしばらく御休又々ひらかな四段目よふござりました其内南御興行又々紙治 〔四〕にての大もらい市太丈とはきつしりとした事其後信仰記三だん目嶋丈の場いかがと存じておりました所に打てかはった大出来をそれより児源代応神天皇などきつと三段目かたりと申て不足なき御声柄ことに近此一しは御上達しかし上り目のしるしか余程小音になられたれどうまみの付た所が大将の草とそ

んじられますいや又千本四ッ目鬼一の三ノ切忠臣蔵九だん目なとき

ついでのでござります

ワル口 〇たい此人は西口の弟子か岸もと

やの弟子か 〇堂嶋 大塔の宮はきつい違ひやう其上も、立からげと

いふ所からサア、とかゝる所を詞にしたのは何の事柏子ぬけのし

た物殊に口の短冊の間はめつそうながひ庄屋殿の座敷ぐらに見

へたぞ 〇頭取 これはしかし横堀の箱ゆへか左様に思召 〇四ッ物に

よってハ又染丈も及ばぬといふ位のことゝござりましよ何といふて

もお声柄が大金なんぞ紙治ぐらいの事が聞たい

上上吉

豊竹麓太夫

仲居出 最前からお前にかゝってたいてい待ッていた事じゃない

わへ頭取さん早ふ評しておくれいナ 〇頭取 これはきつい待かね様

此度白石ばなし二場共又々たつふりとした物此人には耳をそば立る

氣もせもいらす敵役から女形迄それゝにわかる所はお声の一徳い

つぞや千本ノ三段めはきつい出来やう其外娘景清なども出来まし

た ヒイキ なんぼ浄るりが功者でも糸つむぐ様な声はしんきなも

じやかうわかつてこそ浄るりなれ 〇ワル口 なんぼ声が大きふても

ふしの付た講尺はたいくつなものと近此は「五ッどござわるい

か語りとむなそふなかり様 〇頭取 それは此お人の流義かたり出

しはひくうござれと尻ばりに大きくかたられますやはり筑前といふ

所か 〇ワル口 筑前は奥へ行程目がさめる此わろは奥程寝むけがさ

してくるぞや 〇頭取 さりとはどういへばかうとよう仰られますな

んといふても當時の大鳥分ることは此人四段目はとゞめさいて居ら

ゝしるし近此巖柳出口ぐらいの事がなふて氣の毒なんそ花やかな

事を待て居ます

上上吉

竹本男徳齋

〇頭取 チャリの大將男徳丈いつでもうきゝとしたお声

組ヒイキ うつぼはどふじや最前からだまって居れば付上りのし

た事じや 〇頭取 成ほど組丈めきゝと御上達今四海に羽をのす勢

ひなれど 〇五ッ先顔も古くどこやら大鳥の場もござれば此人から評

いたしませう此度時代縁四ッ目宿がへの場さりととは大手なものの女夫

げんくはの閨ちと女がたの口跡が 〇ワル口 衆太郎といふのか由男

と鯉長は毎度聞事なれどきつふ似もせぬぞや 〇頭取 成ほどこれは

たびゝ聞ます事大切斎藤松永つめ合迄さのみこれとは申ほどのこ

となしふし付はいつともひどいものおそめの座摩の場は腹をかゝ

へました何といふても大場な所は故政丈の俵けづつてもけづられぬ

所先はお目のうといに御苦勞ゝ

上上吉

竹本組太夫

ヒイキ 待つて居たゝ 〇ザコバ 八兵衛はどふするのじや

八重組 此いづ平はどふじややれゝたい 〇六ッくつや 〇駒組

二代の後胤駒太を出してもらをぞ 〇頭取 そふ口々に仰られては叶

わぬ先近比の花方さてゝ急に此様にも上かるものかとんと一ト

きの新うじといふ肌何を語られても受よくまづハ御仕合

ワル口 ナニトヤラも久しいものじやおいてほしい うづほ

こまごといふたら引ずり出すぞや 〇頭取 又おせり合かきりとはお

しづまり下され扱此度時代おり六ッ目きつう出来ますこれ迄新物の

内此くらの場合は聞はじめてついたりよふござりますがちと場過たやらどふかさびしいやふで「ワル口」さびしいばかりならよいが人数が多いと両方でしまい口には惣くの詞が一ツになって皆組太夫に成つてのけた「頭取」成程其所もござりますやはりどこやらに持前の世話の気が有て気のどくさりながら聞人は悦ばれます「げいこ出」(六)そふはかいなわしやおふさのゐけん場はひどふうれしかったはへ「さじきより」もみじがりはおもしろかったなれど北の時ほどには思はなんだ「頭取」しかしこれも諸人の受よくおふさは綱丈の時よりもまさったはん昌「上町」みけんの間を多く詞にしられたゆへくすんておもしろふない奥の方はさっぱりとしてよい所もあれと綱太とくらべては一体がいかなぬぞや「頭取」おそめはきついお手がら「近国」へもひゞく大当りしかしかり口はやはり前方の方がようござる北にても鬼一の二切などは出来ましたどふぞ天神記三の口近江源氏七つ目などの様に頼ますぞなんとといふても素黒なしに承知させるといふは及ばぬ事此上にも今少し例のふしをげんじてのびぬ様に語られたら此上はあるまいとかく諸見物の声のかゝるは此人く(七)す

(七ウ・ハオ見開挿絵「時代織室町錦繡」竹本義太夫座)

上上吉

竹本三根太夫

「八重組」此八重太はどうじゃ「新」の口村は聞なんだか「頭取」八重太も段々御上達なれど又々修行の具足した所は上座と見へます「ヒイキ」しれた事こちらは組太より上座と思ひの外こゝへ出したはちと胸がわるい「頭取」左様仰らるゝな扱これより評いたしませ

う此度時代織五ッめいながらもながら去とは苦のないかたり口いつもながら引き上げての口中工合爰らがきつと功の印違ふた物では有ぞ此場はぜんたい文蔵丈のお世話と承つたれど染文蔵丈御出座相さたまらず其内のびくにもなれば弥七丈のお役目と相成随分出来ましたなれとこの上にも文蔵丈ならば何程か面白からうとこれのみ残念定てきもあらばおそらくは此「(八)場につゞく所は有」まいにかへすくも面白い事く「天満」一体此わろ誰を真似るといふ事なくことに我流もなし只何となくせなき所はきつと気前なれどやはり組太のやうにくせ有が徳かい浄るりはきつと黒うこされと素人受が今一いきどうぞ工夫して新ふしをあみ出されたらひどい物で有ふに残念「頭取」新地にて安土の四の切など大きな場を出かされ古物でも阿波鳴戸大塔宮三の口なとけしからぬ出来様妹背山二の切なども綱丈にまけぬくらいのこと南にてもいづぞや塩飽三の中などぜんたい先生の口取なとせらるゝといつても当ります月に村雲花に嵐とやらけれん谷の受がなうて残念何はともあれとかく苦のない所がまた格別く(九)す

上上吉

豊竹八重太夫

「新地」待て居たく祝ふて一ツ打ましょ「京川東」やれく泉平スか貴様の評判聞たさにはるく下つて来た扱御下りの後も又々梅川の出がたり大当りと聞悦んで斗ゐたぞ「頭取」お待ちねは御道理扱此人江戸表御下りより相つゞき評よく京都にてもおどけ曾我新の口村出がたりなど大当り塩町も消る斗の事それより御下り又々右出がたりにて大もらい次に此度白石ばなし十一冊目これは則江

戸にてのお役場いづもながらさっくりと氣がるなかりやう

上上齋 竹本 咲 太夫

〔北辺仙人組〕 めったにほめるがこちとはしみく／＼と聞ぬが前方南三度も聞たれど何かたつてもめつたに釣上^{つり}てきばる浄るじや」

〔九〕

〔ワル口〕 猿廻^{さるまわ}しの親仁と忠兵衛の親仁とは兄弟でも有たかい

〔頭取〕 わる口は御免なるほどうれい場は口にあわねど梅川は出来ました其外チャリ場にかけてはきつものいづぞや融大臣^{おとど}二の切などは出来ましたいづてもかういふかり口がよふござる今少ししつとりと頼ますぞなんでも此人の場といふと見物の悦び当芝居での利もの／＼

上上齋 豊竹 駒 太夫

〔頭取〕 さて／＼すさましい女中では有ルぞ 〔ワル口〕 此人はあこ

や修行せらるゝと聞たがもはや何ヶ国ほどお廻りなされた 〔當嶋

新地にてあこや出がたりの時は相人が染太ゆへかどふやらあこやが高入道のやうにおもはれた 〔ヒイキ〕 扱／＼よふわる口いふ衆じゃ

なんぼ其様にいふても太夫に二代 〔ききつゞくは此人ならで外にな

いサアぶつとでもいふて見やしやれ 〔頭取〕 先々おしづまり下され

さて駒丈改^{かへい}名以来段々と評判よろしく先は重疊定て御親父も草葉の

かげから御祝着でござらう此頃江戸表より御下りなされ打つゝきうけよきとの事何角さし置けつかうな御声とんと御親父に生うつし

關 の 磔

〔頭取〕 近比次第に上りめが見へます此度時代おり三ッ目さのみこ

れはと申程の事なし 〔ききハッ目奥〕 染丈とのかけ合これも大い

〔ワル口〕

歌七の物まねはおいてもらいたい

〔頭取〕 お染の下ノ巻は出来ましたいづぞや塩飽三の口なとよろし

く北にて布引三の中なとも出来ました安土の二ノ切大キな場ゆへかちとかい

上上齋 竹本 梶 太夫

上上齋 豊竹 時 太夫

〔頭取〕 扱御兩人共近比お顔を見受ませぬ梶丈は北新地紙治きりに

て御退座それより稻荷御興行其節もさしてこれ 〔きき〕 はと申ほと

のことなしちと御出勤有てなんぞ当りを待ます

時丈も此比より京都へ御上りとの事どふか入太夫といふた時とはち

と寝入ました大事の所じゃ随分御出精なされいづぞや月見松序切は

出来ましたどふぞ此太夫ともお成なされ御上達をいのります

上上齋 豊竹 源 太夫

〔頭取〕 さて一同に申ませう頼丈は此度白石ばなし五ッ目在所の段

きつと上りめが見へました「所より」女形の口跡が格別にいやらしい成たぞ七ツ目茶屋場かけ合秋夜のお役甚たくった詞遣ひちと念入給へハツ目の口兵法の場」（十二）とかくおかしげなすかしが有て氣の毒

上上（十二）
竹本 中 太夫
上上
竹本 錦 太夫
上上
豊竹 磯 太夫

源丈も稻荷御興行殊に後見とやら別而御苦勞鉢の木は出来ました窓女房は大い「ワル口」此人は乳母がわるふ育てたかあまへる様な「頭取」しかし近比打つゝき御出勤ゆへか大ふん上りましたとかくなんでも受よく御仕合まづは目出たしゝ

上上（十二）
竹本 弥 太夫

上上
竹本 文字 太夫

上上
竹本 是 太夫

「頭取」扱お三人共一所に申ませう弥太丈は北にて昔八丈白木屋受よくお仕合安土の序功も出来ました何分お声からが丈夫にてよふござりますぞ」（十二）

文字丈は近比の堀出し此度時代おりにてニツ目よいぞゝ六ツ目口も少しなれとよし此跡崇禎寺屋しきの場はとんと染丈のあんばいきつう出来ました何にもせよ大きうてよう通りますしかし声がぎん過てかたうござるお氣付られませい先は受よく御手がらゝ

是丈は此比御上京とのこと定て古郷なればよい噂と存るすいふん器用なる仕出しちと上手めき過たる所有との噂北にてかしくの上の巻はひどう出来ましたいつかど詰かたりと聞へます其外なんでもかたりこなす事はひどいぞ外の太夫衆をうつす事も箱と見へます

「頭取」中丈は去秋より御上京とのこといつぞや北にて三日太平記三ツ目の口しつかりとしてひどい出来様南にて紙治のちよんがれもよふござりました随分お声がらもよし今の間に御出世てござらう錦丈はたれぞと思へばの太夫丈先はめてたし師の名を受るとは何にもせよ御満足此度天神へのお勤と承る随分御出精ゝ
磯丈は南にて天神記大い堀江にてはきつい受て有たに御退座は残念此比はいなりお勤橋供養も出来ました前方あこやの松はきつい当り此人もけっかうなお声すいぶんはげみ給へ

巻軸

功上上吉 竹本 春 太夫

「上町」最前から長う細う待つて居た「頭取」お待ちかねは御尤今度の老功竹本の親玉巻軸に居ましたいづれも様申分はござりませぬかナ「惣々」誰がなんと」（十三）いふものが有早う評してもらを

「頭取」近比はお目もうとく御耳も遠いとの噂なれど芸道にかけては又々昔の佛相かはらずいつとても聞あかぬお声「老人」此方共がわかい時分には花やかな事で有たが去々年新地顔見せの時妹背山かけ合を聞たがとうじゃやら紛らはしいやうできこへにくかった「頭取」それはなんと申ても御老衰のかけんいつぞやいなりにて花

系図の道行はお家ながらも我を折りましたこの比いなり天神かけ持のお勤老足^{らうそく}の御苦勞いなりにて北条時頼記の道行はかんしんひらかなの四だん目どふもいへませぬなんほう御年よられても功と申ものはかくべつどふぞいつまでも置たいは此人なんぞ目ざましいことが聞たいく(十三)

淨留理
操評判
闇の磔
下の巻

三味線之部

大上上吉 鶴沢寛治

市本組 くりやどうじゃ 頭取 どのでもござりませぬ今の世に誰が点の打人なき古兵今^{ふるつはもの}にかはらぬ撥うでの達者音のゆたかなる所にうまみあつてこせついたる事彈すまことに大立ものとぞんじますがいづれも様なんと思召されます 惣々 なんと、いふたら其通りぶつともいふものはごんせぬ 頭取 此人そのむかし亀二郎と申せし時よりひとかたならぬ芸と思ふておりましたが岡目八もくとやら 二まちははぬものでござります けいこや なるほどきつと流義といふ所のない芸ゆへちよと聞にはぬかった様にもあれと聞しめるとちがふたものでは有しかし近比は美斗て花が失た様な 頭取 成ほど其所もござりますれどこれは古代な彈方ゆへ左様思召はつなれども此跡の新的口村^になとはしっかりと手厚いものでござりまして此度白石嘶六ッ目始終こうとなる彈やうながらどこやら殊勝なる

所有て味いことくぜんたい古ものなどはなんでもよく吞こんでござるとの事殊に文蔵丈とは別而御懇意^{ごこんご}との事なんぞ連彈^{つれびき}で手ものなどが聞たい定めておもしろい事でござらふいやまた鳴丈などは此お人よく吞こんだものではあるぞなんといふても大鳥く(二二)

太上上吉 鶴沢市太郎

名八組 こちのはどふじゃ 弥七組 当時の日の出弥七はどに置のじゃ 頭取 先お待くだされ扱市太丈久くお顔を見ませなんだ所に去る年御上り竹太義太夫芝居へ御出席政丈と紙治にての出合新地にて伊八丈のひかれた所を撥かず入ての彈方 けいこや あまりにきやかで繁太夫ぶしの間小春のうれいがしまんやうな 南辺 かゆごへのやかましさはとんとちんつきやのやうにあつた 頭取 なれども此方がまづ場の受よく次に菅原二の切さりとはいふまはる手では有ぞ身はあらいその所ちと仰山な様にてさじきより ひんのよい場をちとじやらけたおとなげない 二お彈やう紙治と同じ事で有たぞ 頭取 しかし応神天皇はしっかりとすてう聞へました其外なんでも手を付る事はきついお上手と承る前方の宗玄などは此お人のおはたらきとぞんずる其上下まはりの太夫衆をかたらずこの上手さ手の廻る事は此人につくものはござりますまい ワル口 あまり手がまはり廻るゆへ国太夫めいて来るぞや 頭取 其のちいか仕た事や古郷へ御下りとの事近比京都にて又々政丈とお出合と承る定めて目ざましいことが有たでござらう何にもせよ拍子有てかたりよそふに思はるゝとかく諸見物の声のかゝるは此人の一徳く

上上吉 鶴 沢 名 八 「二八」

「ヒイキ やれ待かねたいござなしに評^してもらを」**頭取** 今で
の音がしら名八丈道行景ごとにかけてはこのお人のこと近比はどの
芝居へもしみ／＼とお勤なく残^ン念承れば駒丈と同道にて江戸へお
下りとの事いつぞや稻荷にて春丈と花景園道行はきれいな事／＼其
後新地にて駒丈とあこや出がたりのお勤駒丈とは御親父からの合方
ゆへか又／＼しっくりとしたもの「フル口」しっくりかしらぬが北
では染太にいちられてなんにもよ^{ひか}弾^{ひか}なんだ**弥七組** 音はきれい
なが弾方は弥七の方がおもしろかったぞや**頭取** それはめい／＼
のひいき／＼と申ものまた／＼堀江にて麗丈とよほどが間御出合に
てござったがいつとも此人の沙汰はよふござった巖柳^{がんりゅう}などはきつ
い出来て有ったぞ何でも「三才」東流は此人いつ聞ても聞あかぬきれ
いさ花やかなことのとんとれ／＼

上上吉 竹 沢 弥 七

頭取 当時のきゝもの弥七丈どなたもお待かねとぞんじます
上町 いふまでもない早ふ評^{せう}してもらをぞや**頭取** 其むかし岸
三郎といふて筑後御出勤の時より生得器用成^{せうとく}手筋と思ふたに違は
ず追々の御出世三日太平記より御退座^{ごたいざ}それより弥七と改^{かへ}東へ御出
座駒丈嶋丈を手にかかれてよりひとしは御上達^{ごたつた}其後江戸へ御下り
にてよほどが間の御勤いよく受よく久／＼にてお上り直様いなり
へ御出座駒丈とあこやの出がたりはきつう当りましたそれより新地
へ御入座いかゞ「三才」したとかへキリの内へ御清^は入り政丈と亀山

にての出合**北辺** 百物語の場はきつう花やかな弾やう外の弾人へ
当^{あた}り付るやらで余り仰山^{げんざう}に有った**頭取** 其後鐘場などもよくそれ
より政丈御退座^{ごたいざ}にてよほどが間は端場^{はば}をお勤の所こがねはくちずと
やら組丈と小栗にてお出合よふ出来ましたノリの間などす／＼聞へ
ました**フル口** すごいはづじや三味の音^{おと}はせなんだもの**頭取**
其くれ顔見せ山うばにて組丈才治丈三人の太当り**北より** 大塔宮
三ノ口は誠にはんなりとしてよかったぞや**頭取** 其翌年南へ御出
座又々政丈との御出合段々受よく今では番付にも残らず竹沢^{てがら}「四才」
と相なるほどの御出世**けいこや** お染は全く御両人の御手柄^{てがら}此度
の時代おりも定めて御骨折^{はねをり}とぞんずる五ッ目六ッ目共よふ付ました
頭取 ぜんたい手を付ることは御上手物覚へは尖し大立ものとい
ふても不足はなけれど今少しやみをお弾なされななんといふても
こるが上手とやら相かはらずきつう御精^{せい}が出ますぞ

上上吉 鶴 沢 鬼 市

頭取 いつの間にやらきつい上々様先生のお助^{たす}かりでござらふ
けいこや 或^{ある}ほど今又蔵丈のかはりともいふは此人新地にて安
達原さいもんなどは味い事で有ったぞさいもんの内こけて弾く思ひ
入きつと受て居ます**四才** **フル口** 此人は折々こける、ゆへ
これも思ひ入^いとは気が付^{つか}なんだ**頭取** いか様あまり手の廻り
過るゆへか折ふしこけ音が聞へますしかし先生の風俗はよく取ッて
ござる**聞じまん** 此人は三根本とはきつい合方と見ゆる二人とも
ちと足早なゆへかきつしりと仕た物**けいこや** 三から二へのテッ
／＼は此人の箱かきりとはするどいものじや**頭取** 染丈でもよ

く呑みこんだは此人一トいきはどふか寝^ねいたやうに有たが近比上りめが見へて来ました今少し落付て彈やうにし給へちとせはしい様にてござる若うは有今一瀬^{なだこ}越されたらきつと片^{かた}うでく

上上言

鶴 沢 三 二

「(五才)

〔頭取〕同じくけしからぬ御出世前方利吉といふて堀江御出勤の節はさのみこれはと申ほどの事もなかったがどふ御修行^{しゆぎやう}なされたやらいつのころよりめきくと御上達いつぞや新地東芝居にて政丈と見源代三段めきつう出来ました其後又しばらくお見受申さなんだ所又々堀江へ帰り新参麓丈相方となられ追々の上りめ其砌千本ぎくらなど出来ました〔けいこや〕承れば文蔵丈御門人となられたと聞ました随分御出精なされしかしちと三味せんかこうと過^へてめりはりがないぞや〔頭取〕さりながら音のゆたかなる大場な所は立者らしき工合が見へますどういふても末たのもしいぞ

上上言

鶴 沢 重 三 郎

「(五才)

〔頭取〕此度時代おり四ッ目達者によふお弾なさるゝ三ッ目咲丈の場もよしハッ目の奥かけ合御苦勞〔ワル口〕大将の跡できくゆへかよい音なれどどふかお杉お玉のやうに聞へるぞ〔頭取〕なんでも怠^{おこた}りなく御出勤なされて修行し給へ近比は西流にかはりました何にもせよゆるやかに聞へて聞よいぞ

上上言

鶴 沢 伊 八

〔頭取〕近比は見受ませぬ承れは京都へお出との事又々政丈との御

出合定めてよろしきうはさとそんずるいつそや北新地にて紙治は当りました繁太夫ぶしの間の手をぬいての弾方きつと受ましたぜんたい大手なる仕出し立者とよばるゝは今の内でござり」〔六才まじょちとお下りなされ侍て居ますずいぶんおこたりなき御出勤を頼ますぞ

上上言

鶴 沢 甚 蔵

上上言

鶴 沢 亀 次 郎

〔頭取〕甚蔵丈は北新地御出勤始終^{じじう}弥丈と御出合安士序切なと出来ましたなれとも三味がちとくすんで来ました今少し花あるやうにたのみます何といふてもどこやらに功の見ゆる所はござるぞ亀治丈は相かはらず当芝居の御勤重疊近比しばらく中絶してござった又々この比より御出勤此度白石ばなし五ッ目さしたる事もなければ出来ます〔けいこや〕まへかた彦丈といひし時竹本座御出勤鬼市丈と」〔六才一所に御入座と見へましたいつの比よりか寛治丈門下となられ当芝居御勤だんく先生のおもかげが見へて来ましたずいぶん御出ッ精にて鬼一丈に追付やうになり給へといひるのみ

上上言

鶴 沢 寛 三

上上言

富 沢 藤 治 郎

上上言

鶴 沢 正 蔵

〔頭取〕さてお三人とも一同に申ませう寛三丈はいなり御勤当芝居

での立^つ三味せん別^{はち}して御苦勞鉢^{はち}の木は当りました手もよく廻るき
れいにもござるぞしかし折ふしはちとけれども過^てて気の毒なれど
も此方が徳かい此度新物定て御骨折と存る」(七〇)

藤治丈も同じく当^あ居御出座いつぞやよりよほど御休と見へました
どふやらちと寝いりましたやうにもあれどお達者はむかしにかわら
ずとふぞおこたひなく御出勤をたのみますぞ

正藏丈は南御勤此度時代おり文字丈の御役大分上りましたけっか
うな御舎兄はありずいぶん精出して修行なされ追々御出世でござら
う

巻軸

上上吉 野沢喜八郎

〔頭取〕むかしより御名人の御家近比はいつかたへも御勤なく残^ん

念前方大坂おもて御下りの節北の新地にてしばらく染丈との御出合
何やかやおもしろい事もござった」(七一)

節二ノ中の御役春丈の場出来ましたしかし三味せんちと気がな
いやうにぞんずる今一いき氣をもたしたら此上はあるまいに残念

〔頭取〕堀江にて妹背山などもよふござりましたなんといふても達
者な所は功のしるし又々動きのとれぬ所がござるどふ見ても京都で
の大将く

人形之部

次上上吉 吉田冠藏

〔才治組〕若手の大将ごちのはどこに置^きのじゃ 〔門三組〕親仁は

どふじゃの〔頭取〕先お待なされ追ッ付いさるがわかりましよ先以

冠藏丈むかしにかはらずきりとは手づよいもの新地にて」(八三)三日
太平記の久吉きつもの六ッ目^め絵像^{えぞう}に給仕の問きりとはおど

ろき入^いましたいともこういふ形^{かた}で違^{ちが}ふてもらいたい九ッ目やつこ
姿の出端^{はし}ふり出す手先きの所ちと見え過^へたれどうまいことノ

〔場より〕亀山の時刀や卯右衛門はおとなしうてきつい出来やう

フル口^{くち}なんじやしらぬがあまり達者過^へてなんでもあればもの
になるぞや〔頭取〕或は腕^{うで}は達者なことしかしあまりよい身を遣

ひ過^へされてちとうつしい南にて前方白太夫は先^ま師のおもか
げ有^あってきつと承知くフル口^{くち}それはど腕^{うで}が達者なら涼^{すず}で栄五

郎^{らう}が仕^してほしいなんしやしらぬがとかく紋日^{もんじつ}受^うじやぞや〔頭取〕わ
る口仰^うらるゝな何^{なん}といふても今での大人形遣^{もんし}ひ此度時代おり嘉平

治道三など出来ましたしかし」(八五)道三はあまり腰^{こし}がかみ過^へてち
と見えがいかゞしくなれどもつよい事ノ先^ま年吉田の一類^{いれい}もめの

節此人一人跡にふみとまり竹田と苗字^{ななざ}を改^かめてのお勤^{きん}さりと忠
臣今の冠字丈にもおそれぬはお顔の古いだけこらを見ては先上座

におかねばならぬ先はおこたひなき御出勤御苦勞く

次上上吉 吉田才治

〔ヒイキ〕待つて居^ゐたく〔頭取〕お待かねは御尤^{まう}いやまた若手で

これほどの人も外にはござりませぬ先何役でもゑりきらひのない所
はとんと眠^{みんし}といふはだ新地にて亀山の関助おはつの長藏などはき

つい大出来〔見功者〕関助は口の吉兵衛の問より切の奴の時^{とき}は」
(九〇)おどろき入^いました立^たなどは冠字にもまけぬくらしい事長藏は只

なんとなくたのもしう見へたぞ」**頭取**「顔見せの山うばはきつい出来やうちと当氣は見へたれど場の受よく小栗の浅香などもよふは有ったが注進の間ちとてれたやうに見へて」**さじきより**「ぜんたい此人けしからぬ器用筋なれど人形のうごかぬ間にどふか真がないやうな近比御病身ゆへかちと御工夫あれかし此上地の間人形に真のあるやうに氣を付られたら又とつぐものはないぞ」**女中**「うすゆき清水場の出遣ひ妻平は花やかでひどうよかつたはいな」**頭取**「或るほどこれはいづれもよふ出来ました兵衛のおくかたも大出来」**ワル口**「女がたはお山もけいせいお姫様もけいせい頭は男女ともに飛入形じゃぞや」**頭取**「わる口は御免近比南にておふさの時徳兵衛」**九**と重井筒の女房二役とも出来ましたお染の節油やの後家うしろを見せられた時は毎度ながら諸見物の大悦びでござった此度時代おり弁のつぼねあを葉宗太郎久吉いづれも出来ましたとり分ニッ目にて女がたの立は場の受よくお仕合其外何を遣はれても素黒なしに声のかゝるは此人ことに所作などもひど上りました子もりの所作おぼこがしらの三番叟などはきつと／＼とりわけ新地にて三日の時おさまのかしらはよく遣ふたもの格別御苦勞でござったあまりに手が利過るくらいのこと何にもせよ今での利もの器用なる事はつゞくものはござりませぬずっと出らるゝと老若男女が才治さま富士屋く

上上吉 桐竹門蔵

十五郎組 お山の名取重五郎はどふじや」**頭取**「或ほどお待かねではござりませうなれど門蔵丈近年めきくと次第の上りめ近此は

お山も大分出来ます」**ヒイキ**「ぐど／＼いはずと早ふ評を聞してもらを」**頭取**「前方塩飽の時四国へんろはひどいものでござりました三の口など一まいで有たぞ新地にても龜山にて又四郎おはつの九平次などきりとはいけしからぬ出来様」**見功者**「近比冠子丈に付てより利に手をきかさず遣はるゝ所がきつと上りめと見ゆる殊に御親父のおもかげあつてきつう見上たぞもみちがりの帷茂なども出来ました松王などもさしたることもなけれど場の受よくお仕合」**ワル口**「前方は由男の身ぶりが毎度出たが近比はあまり見あたらぬぞ」**十****頭取**「なんといふても若年のきゝもの今少し人形に氣がないやうに見へます爰の所へお氣つけられたらなんにも申分はないぞまづは受よく御手柄く

上上吉 豊松重五郎

頭取「さていづれもさまお待かねのでござります」**ヒイキ**「おやまにかけては何一ッふそくなき立者いかな石部金吉でもあちいな氣にさすは此人」**ワル口**「ふそくはないかしらぬが女かたは何でも背むしになるぞや」**ヒイキ**「あごたゝいたら引きずり出すぞよ」**頭取**「さりとともうよふござります此人前方竹本座御出勤の節つゞれの錦おてるなとはきつい出来ほんに其かあいらしき腕久のおさんも出来ましたがいつぞやより」**十**「十一オ十二ウ見開キ挿絵」**基太平記白石噺**「豊竹此吉座」**当芝居**へ御出座以来上見ぬ驚とやらで遣ひ方に大分我まゝが出来ますやうなちと御氣付られませい」**見功者**「或るほどお山は藤井流の骨肉にて申分はなけれど頭取のいふ様にちと折くは無理な所が有様なしかし此度白石ばなし宮

城野おその申分なくよふ出来ますとをるのおじ副大臣の時ば、蝶々の長五郎の母などはきつい出来で有たぞうちかけさばきはきついものく

〔頭取〕 近比はあまり出づかひをなされぬかたんの出づかひはきつひ出来でござったなんでも器用なる手すじにてたのもしうござりますすいぶん胸ぐしにお元付られちとゆがむやうに存どういふても場の受よく声のかゝることは当芝居での第一く（十二）

上上言

若竹友五郎

〔頭取〕 当芝居での立者友五郎太相かはらず手びしいものどう見ても先師東工丈のおもかげ此度白石ばなし宇治常悅舟問屋くま二役とも出来ます（ワル口）常悦にてハッ目魔術まじゆつの所ねからす（ワル口）い気色はないぞや前方冠蔵丈当芝居へ出勤の時はどこに居られたやら知なんだ（頭取）わる口は御免ごめん何と申ても先師東工丈死去の後は当芝居にての一筆御手柄しやていりくはんかしし御舎弟里環丈御死去定めてお力落と存どうぞ相かはらず御出勤にて何ぞ目さましい事を待つて居ますぞ

上上言

豊松元五郎

（十三）

〔頭取〕 相かはらず当座の立者またくうごきのとれぬ所はさすが功のしるし違ふたものてござります此度白石ばなし丸ヶ瀬秋夜紺屋弥左衛門庄屋七郎兵衛三役とも先大休見功者秋夜はどふしたものでかあまりおとなし過むほんて反逆とうりやうの棟梁とうりやうとは思はれぬ作意さくごのあんばいか基の場などもぬるふ見へました（頭取）成ル程くらはきつと見所と存ますいつぞや伊賀越の時又五郎のお役はとんと奥山でござつ

た千本校の権太なども当りましたぞ其外お山なども近比は分大やはらかで見ようござるどういふてもふるつはもの古兵く

上上言

吉田文蔵

〔頭取〕 此人久く東武御修行にて去々年お上り南竹本座へ御出勤さてくきつい仕上（十三）やう応神天皇にて衛士の助などは出来ました其後新地へ御入座かしくの時喜平次安土にて久吉信水いづれも丈夫にてよしうくにておせきの役は大ていしかし女形はちとぎく付たやうにて見にくうござるどうぞ今少しやはらかみを付たいもの（見功者）北にてあこやの時重忠の役刀を杖にといふ文句刀を杖につきおとがいをもつて行かれたはどふした物さりとはいふより正直過てよろしからず（頭取）此比はいなりへ御勤録の木出遣ひは当りました殊に当芝居にては立者一しは御苦勞道念などもよくござつた何といふても気持の高いだけ全体に今一いきやはらかみが付たら申分はござらぬなんぞ目さましいことを待ております

上上言

豊松東十郎

（十四）

〔頭取〕 近比相つゞき御勤ゆへ大分上りましたぞ北にて安土の時蘭の方はしっくりとしてよし雁がねにて安の平兵衛などもよふござつた（ワル口）そこら中であこやをつかはれたがいづ見ても同じおもしろなき無性にびこしゃことげさくなあこやじゃ（頭取）わる口は仰られますな南にて真鳥のおさく信仰記にてぜさい女房など出来ました（ワル口）ゆき姫は気がひかしらぬがきついあばれやう（頭取）いかさまこれははつきりめかずしかし一ッたいがよほど上

りました今一トいき心ッをこらし給へ追付御出世でござらう定めて御舎元五郎丈もお悦でござりませう

上上書

吉田 真吾

「(十四)

〔頭取〕近比はお顔を見受ませぬいつかたへ御出なされたぞ去々年は南御出座信仰記にて待従の役三の口などり、しいこと男鑑にて八十嶋これとは申ほどの事なしとうぞ冠子丈に付て御修行なされたらよろしからうにざんねんちと足をとめて御出勤をたのみますぞ

上上書

吉田 磯五郎

〔才藏組〕当時の花かたこちのはどこへ出すのじゃ〔頭取〕先お待ち

下され才藏丈も追々御出世なれど先お顔も古くござれば此人から評いたしませう新地にてよほどが間御つとめ紙治の小はるなどはきつう出来ましたぜんだいどふした事か此人のお山はちとしゆんで」〔十五〕見へますしかし小春はいつそそれでよふござった一体をちと花ある様にお気付られませい〔見功者〕安達が原の袖はぎなどはよい御役目きつと当りを取られそふな所じゃに何の事もなくどうじややら張合のないつかひかた今少し気をまたしたらけつこうなお山遣ひじやに残念〔頭取〕これはいかさま御尤なる仰られ方しかしおはつの時おそくはよう出来ました随分御出勤なされ追付御出世でござらう何といふても受よくお仕合く

上上書

吉田 音五郎

〔黒がり連〕此わろを爰らに置くはさりとはやすいものじゃひいき

するじやないが若手に今此くらいの人はないが最つと上座に仕ても」〔十五〕よからふに〔見功者〕なるほど小手もき、腕も達者にはあり今一トいきこられたら急度立者になる事は見へて有にもう大將じやと思ふて居らる、か堀江にても惣々を下に見てゐる氣前が見へるを爰らはまだ早ふござるぞ師匠などやふじやと一ツ所に住て修行召れたらよろしからうに残念〔頭取〕此人は吉田九八丈と申せし人の御舎弟と承る此九八丈も器用なる芸にて有ツたがおいしい事は若死なされて残念此人も相かはらず器用成仕出し此度白石ばなしにて谷五郎の御役在所の場などよく出来ますそ先生才藏丈の佛あつて丈夫なこと当芝居でも大分シ際が立て見ゆるぞなんと申ても氣もちがたくましうて末たのもしうござる追々おもしろいことを待て居ますぞや」〔十六〕

上上書

吉田 才藏

〔ヒイキ〕どふやらこうやら生れた委細かまはず評してもらいやんしや〔頭取〕さりととはきついお待ちかねやう扱御舎兄に相かはらぬ器用成お人次第に上りめが見へます此度時代おりにて松永赤松左衛門いつれも出来ます松永も手強てよいぞく此跡のお染にて勘六はきつい大出来く北にて龜山の時中野藤兵衛など暮切てうちんの場いさぎようてよいぞとかく御出勤が第一立者と成ふ事は見へてござる御舎兄いつぞや三番更御遣ひの時足は此人との事けしからぬ出来やう別而御苦勞なんでも兄御にかはらずうけのよさきつい愛敬く」〔十六〕

上上齋 若竹武十郎

上上齋 吉田三吾

〔頭取〕扱御二人とも一所に評いたしませう。武丈は此度時代おりにて嘉平治女房のお役などしつくりと出来ませう。此跡のおそめなどこれとは申ほどの事なし。一体がなんでもちとしゆんで老くろしう見へます。御氣付られませう。

三吾丈は三好松洛丈御子息と承る御親父も竹本芝居にては功ある御家柄相かはらずたのもししい仕出しとかく先生のかはり役をなさるといつでも出来ませう。ぞそれゆへか時々はかり役にて毎度見物衆中はだまされてござるぞ。北にてはんがくなどはきつい出来やうせんたい。娘形はなんでもかあひらしうござる。此比はいなり」(十七) 御動梅がゑも出来ました段々立者の孝が見へてうれしいぞ。

上上齋 吉田虎藏

上上齋 藤井大吉

上上齋 吉田乙藏

〔頭取〕いづれも一同に申ませう。虎丈は是迄相かはらず新地之御動段々上りめが見へます。一体器用なる仕出し。近比安土にて別所の御役當芸にての立人形大分見上ました。かしくの時三吾丈と道行出遣ひ互に取かへての遣ひ方花やかにござった。ワル口出遣ひの時定めておしう代をよほどはらはんしたて有ふ。〔頭取〕何といふても

次第に上る手筋随分御修行が肝要」(十七)

大吉丈は前方吉田大蔵と申せしお人どふか。近比はどの芝居へもしみく御勤なされぬは惜しい事や。はり才治丈に付て御勤なされいであたら事く。此比いなりお勤出来ませう。ちと落付てお勤なされといひます。

乙丈は時代おりにて春永など出来ました。しかりとして見よいぞ。道行の弁当持もおかしうござった。怠りなく御出精く。

上上齋 若竹林三郎

上上齋 豊松國八

上上齋 豊松弥三郎

〔頭取〕林三丈は此度白石ばなしにて伊賀大七にくいことく。何といふても古いだけ功が見ゆるぞ」(十八)

国八丈は此度白石ばなしにて伊達惣惣六。いづれも出来ました。弥三郎丈は近比見受ませぬ。北にて安土の時吉六三輪左衛門二役とも大分上りました。ぞ其外の衆中は口の目録にのせました。

巻軸

功上上齋 桐竹門三郎

〔頭取〕人形の巻軸門三丈相かはらず御出動どう見ても古兵又々親仁やくなどは外にいらい人なき所さすが。御老功なんでも壮年の時分より竹本座にての立者先冠子丈御退座以後はいつても立役をお取りなされ惣座頭と見へました。〔見助者〕ぜんたい此人前々より手し

ぶい遣ひ方小手は少しきかぬ様にもあれど一体人形のうごかぬ間
にうまみあつてもとより腕は「千八」余人にすぐれし大丈夫今に
其おもかげはかはらず大塔宮の斎藤などは此人におよぶものは有ま
いと思ふ程のこと別而岩のはざまのといふ文句の時扇を左リへ持か
へ汗手ぬぐひを出し顔をおしぬぐふ所は何とないうなれどとくと
見てはどふもいへぬ性根きつとく行^き届^{とど}ますぞ」頭取 いか様
これはきつと見所と存します近江源氏の時北条和田兵衛の二役何
も大出来でござつたとり分ヶ北条は八ッ目九ッ目ともかんしんいた
した近北にて窓女房の時江戸平のお役これは前のお役にて只なん
となく平敵の遣ひ方さくくりとして出来ました其外石井兵衛舞づる
や伝三などさしたる事もなけれどこやら殊勝なる所有よふござり
ます当時いつかたへお出やら見受「千九」ませぬどうぞちと御出勤
あつてなんぞ斎藤ぐらいの事が見たうござる誰がなんと申てもう
きのとれぬ大立者く

惣 巻 軸

極上上吉 豊竹嶋太夫

〔頭取〕今の世にかくれなき浄りの先^{もはや}生最早一ッ世一チ代も相
済芸道も首尾よく御引^{しゅび}なされたれど末相かはらぬ御壯健殊に余人
にすぐれし御好にて毎度町方の座敷などは御勤故度々承るがお声が
らと申御達者は昔にかはらずおもしろい事ゆへ何角なしに惣軸にす
へました此席のひつきやうしまりと申物ゆへかくははからひました
御好土がた思召もござらば仰られてくだ「千九」さりませ 惣々

これは頭取の大出来きつとおもしろいぞとてもものに細評がして
もらいたい 〔頭取〕仰られいでも此方より申たうてくなりませぬ
此人初床は竹本座にてひらかなの時三の中帷場のお役最初よりの大
出来は皆人のしる所其後菅原にては四ノ切けしからぬ大当りそれよ
り打つゞき評判よろしき所忠臣蔵の時太夫衆中もめ合に付此太夫丈
と此人百合太夫など一ッ所に東へ御出座此時またく橋供養にて四
ノ切はじめよりの大もらい其後かしくの新やしきなどもきつとく
それより二度目の和田合戦の節若太夫と改名大切に和歌八景の出が
たり出来ましたそれより筑前丈御引なされ三段目お受取初て信仰記
のお勤大出来く其後もかれこれおもしろいこと多く官軍「三千」
一統しきりにて御退座しばらくおやすみ其内竹本座へ又々嶋太夫と
改^かめて御出勤廿四孝三段目大出来打つゞき忠臣講釈にて六ッ目八ッ
目ともあたりましたそれよりも阿波鳴戸なと當りものかずくござ
りますれど 〔ワル口〕頭取のやうにいふてはあたりものばかりで一
つもわるいものはなけれど鼻声^{はなごゑ}なものをいひたてたらなんほうあ
ることかまづ追とて南にて京みやげののけん場此時北の新地にて
同じく此嶋太夫もつとめられたゆへ両方とも聞て見たが染太から見
ては一ッ向^{かう}やくたいで有ったぞ其外三日の七ッ目なども鐘太染太に
おされてかげはなかつたぞ 〔頭取〕あたりふあたりはいかな名人達
にも有り内のこと「三千」何にもせうれい場は此人につゞくもの
はあるまい 〔ワル口〕うれいもあり声がうま過ぎてきよくるやう
にきこへることも有るぞ 〔頭取〕どう仰られても大將にちがひはこ
ざりませぬ今でも此人のかんばんなど出したら大阪中が大よろこび
ことに北南京都までも首尾よく一ッ世一チ代も相済での御仕合はま

ことに比類なき芸道のはまれと尽せぬ春こそ目出度けれ

作者 而笑「二十一オ」

堺筋長堀橋半町北

増田源兵衛

竹 豊 故事 全三冊

あやつりしばしやうりさみせんになきやうとう
操芝居浄留利三味線人形等の故事来歴くはしくしるし并ニ
故人太夫衆中の噺評判

増補外題年鑑 全一冊

おかこ
往古よりの浄留利の外題をあつめ竹本豊竹の初日太夫受領出座
たいさねんけつで
退座の年月出がたり出づかひあやつり人形作意両座諸事のはじ
まりをくわしくしるす
「二十一」

天明元年

辛丑 九月吉日

尼崎町老丁目

丹波屋助七

音曲高名集

今世におこなはるゝ浄瑠璃といえる謡曲の起原は 天正の頃
織田信長公に仕へたる小野の於通矢矧の長者が娘浄瑠璃姫
牛若丸に愛情したる事十二段に作りたるを堺の驍者角沢檢
校三味線にかけて音節をなし是を浄瑠璃といえり 扱又寛永
以来浄瑠璃太夫といへる者世に数多有しか今の儀太夫節に
あらず 江戸鹿の子」(二) 江戸図鑑に見えし浄瑠璃太夫は元
禄の頃有名の者 堺町土佐掾 節 土佐 甚左
衛門町江戸半太夫 節 江戸 元大坂町 肥前太夫 節 肥前 呉服町虎屋永
閑 水蘭節 一流の祖 其あまた見へたれとも皆一家の音節なり 貞享の
比難波に竹本儀太夫といへる者一家なし 同二年丑きさらぎ
朔日 道頓堀にはしめて操座に櫓を揚げ正徳のころ江戸に」
(三) 下り操座に在りて新曲をかたり 門人も数多有て後に豊
竹と二流して専ら流行せしとかや 当時政太夫八十路の齡に
て其音声さはやかに実此道の巨壁なり 予幸ひに此時にあ
ひ 政翁に随ひ此座席をつとめ折々普く古事をも尋ね終えし
も稽古名理に協ふならむしかして元祖をはしめとしでそ

の」(三) 道に優なる人々をあつめ直に小冊となし 後世へ残
し此道にあつきおちこちの人々へ伝へ侍らむと言爾

文化三丙寅年

后三代目改

野澤 重五郎

野澤 八兵衛」(二)

浄瑠璃の元祖にして貞享二乙丑年二月朔日大坂道頓堀に始て操座の
櫓を揚る

戯題 愛染川

生涯の浄瑠璃数多し中にも末世までも評判したる浄るり戯題

佐々木大鑑 三ノ切

自然居士 同

蟬丸 同

おはつ 曾根崎心中

おふさ 重井筒

反魂香 相ノ山

おきん 大 経 師

徳兵衛 劍本地 もくさや

姫山姥 三ノ切

天神記 三ノ切

相模入道 三ノ切

娥哥かるた

後に受領して 竹本筑後掾藤原博教と言（三才）

正徳四甲午年九月十日卒行年六拾四才 法号 釈道喜と言

門 人

豊竹若太夫 陸奥茂太夫

長崎重太夫 二井彦太夫

多川源太夫 内匠理太夫

竹本難波太夫 豊竹万太夫

竹本喜代太夫 竹本頼母

若竹政太夫 竹本彦太夫

竹本文太夫（三才）

前名竹本采女言 豊竹若太夫

元祿十二己卯年三月十一日始て櫓を揚受領して豊竹越前掾藤原重泰と言

生涯評判受たる浄るり戯題

東山殿子の日遊三ノ切 鎌倉三代記 同お千代半兵衛二腹帯

大佛殿三ノ切 長柄人柱 同 那須與市 同

後 藤三ノ切 苺 萱 同 和田合戦三ノ切

二つ 巴中ノ巻 同 釜煎 野中隠井長吉殺

糸 仙人三度目 時頼記

時に延享二寅年五月一世一代相勤隠居す

宝曆十四年申年九月十三日卒行年八十四才（四才）

門 人

豊竹源太夫 豊竹品太夫

豊竹要太夫 豊竹湊太夫

若竹政太夫事 二代目 竹本儀太夫

後受領して 竹本播磨掾藤原喜教と言

末世まで評判うけたる浄るり戯題

国性爺三ノ切 大塔宮三ノ切 山崎与次兵衛

篠原合戦三ノ切 日本振袖三ノ切 三浦大助ニッ胴

博多小女郎 鬼 一三ノ切 河内通三ノ切

兜軍記三ノ切 隅田川三ノ切 大友真島三ノ切（四才）

川中島三ノ切 応神天皇三ノ切 宵庚申八百ヤ

芦屋道満三ノ切 つづれの錦土手 赤松田心三ノ切

御所桜三ノ切 小 栗三ノ切 ひらかな三ノ切

薄ゆきはら切 厂かね矢法 兜源氏三ノ切

大友真島三ノ切

延享元子年七月廿五日卒行年五十四才

法名 不聞院乾外孤雲と言

竹本頼母

此仁筑後掾芝居を勤名人にて国性爺九仙山度々語られたり

前名彦太夫 竹本大和太夫」(五才)

播磨縁におとらぬ名人にて始終四の切語りなり
生涯評判よろしき浄るり戯題

日本振袖 四ノ切 寿門松新町 宵庚申在所
川中島 四ノ切 真島 四ノ切 鬼一 四ノ切
篠原合戦 四ノ切 京土産 兜軍記 琴貴

前名沢太夫 豊竹和泉太夫

越前弟子にて竹本座を勤両座の四の切語り名人

芦屋狐別 赤松折の段 御所桜 四ノ切
磯馴松 四ノ切 時頼記 四ノ切 大仏殿 四ノ切
長柄人柱 四ノ切」(五ウ)

前名品太夫 豊竹河内太夫

和泉におとらぬ名人にて四の切語生涯評判よろしき戯題

那須与市 四ノ切 後藤 四ノ切 和田合戦 四ノ切
苅萱狐川 四ノ切 釜ヶ淵刀壳 田村丸 四ノ切
五厂金紺屋の場

三輪太夫 始 竹本大和掾
内匠太夫 大隅太夫 ウリン

豊竹座を勤又竹本座に戻り播磨跡続となる節語りの名人なり評判よ
き浄るり

ひらかな鐘場 うす雪心中 双蝶々はしもと
恋女房十段目 役行者 三ノ切 蛭ヶ小島 三ノ切」(六才)
安達 三ノ切 あいご 鐘場

前名合羽伊太夫 美濃太夫 此太夫とも言 豊竹筑前掾

此人播磨の跡を勤名人なり調子ひくきはしめ
生涯評判よろしき戯題

富士見西行 三ノ切 夏まつり 八ッ目 楠 三ノ切
菅原 三ノ切 千本桜 三ノ切 忠臣蔵 九ッ目
橋供養 三ノ切 八重桜若林屋 物草 三ノ切
玉藻前三ノ切 一の谷 三ノ切 勲功記 三ノ切

豊竹嶋太夫

スワウ丁平右衛門と言」(六才)

越前掾孫にて大立もの美音なり生涯評判能浄るり戯題

菅原 四ノ切 橋供養 四ノ切 八重霞 新やしき
物草 四ノ切 一の谷組打 同 四ノ切
信仰記 三ノ切 祇園女御 三ノ切 岸の姫松 三ノ切
二十四孝 三ノ切 講釈 八ッ目 出世 七ッ目

二代目 竹本政太夫

サコバ十兵衛西口トモ言

此人播磨の名をうけ三の切語り

生涯評判佳なる浄るり戯題

菅原 二ノ切 天祥山 千本桜 二ノ切 おなじく狐

忠心蔵 十段目 四段目 双蝶々ハツ目 布 引 三ノ切「モウ

恋女房 四ツ目 道風 三ノ切 姫小まつ 三ノ切

日高川 三ノ切 菊水巻 三ノ切 安達 四ノ切

蘭奢待 三ノ切

豊竹駒太夫

此人高調子上手なり生涯評判よき戯題

苧萱 二ノ切 和田合戦 二ノ切 釜ヶ淵 硯のうみ

東かゞみ 三ノ切 もの草 二ノ切 一の谷 二ノ切

信仰記 四ノ切 三ノ切 岸姫松 四ノ切 番場忠太 三ノ切

檀の浦琴 貴

前名 和佐太夫 竹本錦太夫

錦武と言「モウ

此人異風なる声にて面白し上手なり生涯語りものうち評判の戯題

釜ヶ淵 竹瓢たん 富士見西行 二ノ切 楠 三ノ切

菅原伝授 四ノ切 序 奥切 千本 桜序 ノ切 忠臣蔵 六ツ目

布 引 三人上声 恋女房 六ツ目 道風 ホウリン

姫小まつ 二ノ切 日高川 二ノ切 菊水 四ノ切

崇禅寺墓所

前名 内匠太夫 竹本千賀太夫

大和掾の弟子にて事知り共ごとかなりなり

あいごのわかくら打は此人の節残れり

竹本土佐太夫「ハモ

久兵衛と言

此人至て名高し併是ぞと言事なし少しの内三代目政太夫となる

竹本紋太夫

播磨掾弟子にて名高し後受領して竹本上総掾と成

生涯名高き語りもの戯題 薄ゆき 清水の段 伊呂波縁起 わしの段 出入の湊 長子

橋供養 二ノ切 二つ蝶々 米やの段 布 引 二ノ切

竹本春太夫

大和掾弟子にて評判よし美音也名高き語りもの戯題「ハモ

あいご道行 道風 道行 勘当 蛭ヶ小嶋 よろひ 若せ

日高川 道行 菊水巻 二ノ切 安達ヶ原 二ノ切

花系図道行 妹背山 三ノ切 道行

豊竹鐘太夫

此人大音にて後に大立物と成生涯語り物の内評判の戯題

一の谷序 ノ切 信仰記 二ノ切 二十四孝狐火

忠臣講釈 セツ目 出世大功記 九ツ目 近江源氏 ハツ目

竹 本 染 太 夫

此人中興の上手にて新物面白く節を語られたり

生涯評判よろしき語りもの戯題（元さ）

日 高 川 四ノ切 菊 水 序ノ切 安達原 序ノ切

極 彩 色 大川町 二十四孝 ニノ切 忠臣講釈 四ツ目

出世大功記 四ツ目 同 玉 椿 妹 背 山 万歳
三ノ切

しわく七島 三ノ切 伊 賀 越 五ツ目
六ツ目切 教 興 寺

お千代
半兵衛 八 百 屋

竹 本 岡 太 夫

此人三ヶ津にて評判よく生涯語り物宜敷評判の戯題

蘭 奢 待 四ノ切 袖 か ぐ み 海玄
海聖 由 良 の 湊 鶏

絹 川 提 羽生
むら

竹 本 百 合 太 夫

竹 本 文 字 太 夫 （元七）

二代目 竹 本 紋 太 夫

其名高しといへども二ノ切迄ゆかず其比名人多き故歟

竹 本 喜 代 太 夫

豊 竹 湊 太 夫

甘 塩 伊 太 夫

豊 竹 要 太 夫

竹 本 君 太 夫

此人歴々なれども末世に残りたる戯題しれず

前名 時 太 夫 又 八重太夫 豊 竹 此 太 夫

岩田鐘屋佐吉と言

筑前縁弟子にて後に大坂堀江市の川へ芝居を建新浄（千さ）瑠璃古浄瑠璃興行して世話語り上手立物也時代物古人筑前の三ノ切不残語られたり中にも生涯評判よろしき戯題

妹 背 門 松 質 屋 恋 飛 脚 新 口 村 合 邦 住 家

出 口 隣 同 士 桂 川 帶 屋 三 国 無 双 三ノ切

木 下 蔭 壬 生 村

前名 中 太 夫 三代目 竹 本 政 太 夫

塩町はりまや理兵衛と言

二代政太夫弟子にて明和中より文化年中の間三の切斗語られ立物上手なり三ヶ津評判よし播磨二代目政太夫場の三の切のみ語られ中にも生涯評判宜敷浄るり戯題（千ッ）

出世大功記 本能寺 龜 山 嘶 在 所 紙 屋 治 兵 衛

比 良 嶽 三ノ切 彦 山 権 現 毛 谷 村

竹本住 太夫

国根とも住吉屋文蔵とも言

二代目政太夫の弟子にて三の切語り取分け江戸にて評判よし別て能くかたりしは

伊賀越 八ツ目

五大力 ミツク

かゞみ山 セツ目

花上野 志渡寺

本町育いとや

孝行酒屋

豊竹麓 太夫

大坂にて評判よし立物にて名高し別て生涯評判うけたる浄るり戯題「十一」

三代記 セツ目

花 樺 四ツ目

大功記 十段目

蝶花形 八ツ目

出口 四ツ目

木下蔭 セツ目

竹本綱 太夫

シンラウシトモ言

三ヶ津にて評判よく別て生涯語り物の内名高き戯題

妹背山 ニノ切

秋津しま

近江源氏 九ツ目

小さいな 大 津

古澤 女ごの島 二ノ切

前名 倉太夫 三代目 竹本紋 太夫

此村屋治兵衛と言

取分け江戸にて評判よく中にも生涯の内評判の戯題

白石嘶 セツ目

伊達競 とうふや

花の上野 品川「十二」

補増 紙屋治兵衛 内の段

竹本組 太夫

ウツボト言

大坂にて評判よろしく浄るり語りし中に

お 野崎村 古澤

鬼 一ニノ切

古澤 子持山姥 二ノ切

古澤 ねひき新町

前名 和佐太夫

豊竹若 太夫

其名江戸にて高し生涯の内評判よき浄るり戯題

先代萩 御殿場

お 新八百屋

小田館 五ツ目

古澤 三勝 書置「十二」

二代目 豊竹時 太夫

カサゴト言

妹背門松 油ヤ 名人なり

二代目 豊竹 八重太夫

伊豆平ト言

おしゆん 堀 川

名人なり三ヶ津にて評判よし

二代目 豊竹駒 太夫

八幡すしと言

此人親の語りものなり

竹本 三根太夫

八兵衛と言

妹背山 酒屋 城 木屋 糸さくら 小石川

ひよく塚 花川戸

お千代
半兵衛

万代曾我

五人切 名人なり大坂にて評判よし」(十三ウ)

竹本 咲太夫

男徳斉と言

生涯の内評判受たる浄るり戯題

昔 八丈 鈴ノ森

二代目 豊竹 百合太夫

鬼と言

此人大坂にて評判よくチャリ語りの上手なり 其外生涯評判よろし
き浄るりの戯題

妹背山 序ノ切 伊賀越 ハッ目

竹本 内匠太夫

畳屋久四郎と言

生涯のうち評判受たる浄るり戯題

本町 育行 徳 矢 口道行

竹本 村太夫

中村屋源次郎と言

生涯の内評判よき浄るり戯題

鎌倉山 セツ目 博多 織中ノ巻

豊竹 氏太夫

天満屋清五郎と言

生涯の内語り物評判よき浄るり戯題

大功 記セツ目 狭間合戦 五ッ目

源七と言」(十三ウ)

生涯の内評判能浄るり戯題

伊達 競セツ目 比よく塚 大鳥村」(十三オ)

竹本 筆太夫

油屋佐助と言

生涯の内評判よき浄るり戯題

おつま
八郎兵衛 鰻 谷

前名 梶太夫 三代目 竹本 染太夫

京屋幸七と言

初代 竹本 弥太夫

紙屋儀右衛門と言

江戸にて評判宜生涯語り物の内評判能浄るり戯題

淨瑠璃評判記集成 中

生涯の内評判能淨るり戯題

鎌倉山四ツ目

初代 豊竹頼太夫

米屋利右衛門と言

生涯の内評判よき淨るり戯題」(十四才)

白石嘶逆井村

前名 浜太夫 二代目 竹本綱太夫

猪の熊甚兵衛と言

生涯の内評判よき淨るり戯題

阿漕ケ浦

竹本越太夫

大和屋利助と言

生涯の内評判よき淨るり戯題

鳴戸順礼場」(十四才)

竹本座三味線

鶴沢平五郎 大西東藏

富沢藤治郎 鶴沢文藏

竹沢弥七 鶴沢市太郎

同 作者

五六

長谷川千四 竹田出雲掾

近松半二 三好松格

同 人 形

桐竹三右衛門 桐竹助三郎

桐竹門三郎 桐竹勘次郎

古今二代目 吉田文太郎」(十五才)

豊竹座三味線

竹沢藤四郎 野沢文五郎

鶴沢十次郎 鶴沢名八

竹沢和七

同 作者

並木宗輔 並木丈助

安田蛭文

同 人 形

藤井小八郎 若竹藤九郎

豊松東五郎」(十五才)

豊竹座音より立物弾名人にて名高し

鶴 沢 寛 治

前名 三次 鶴 沢 蟻 鳳

三ヶ津にて評判よろ敷西東を動音色妙にして上手なり

鶴沢鬼一事 松 雨 斉

文蔵弟子立物にて大音なり

前名 駒吉 竹 沢 弥 七

西東の太夫語り能小音なれども妙なり此人鶴沢とも言

前名 安次郎 鶴 沢 清 七

ひんよくきれいにて名高し

前名 吉五郎 野 沢 喜 八

京都にて立物なり上野沢家皆此人の弟子なり

初吉五郎と言
又松屋町とも

野 沢 吉 兵 衛

(十六オ)

古今拍子よく面白き事妙なり

野 沢 庄 次 郎

語りよき事真実派手にて妙に上手なり

初 富八と言 野 沢 八 兵 衛

江戸にて希者数年立物にて名高し

音曲 高 名 集

初 吾八と言 鶴 沢 蟻 鳳

後年喜桑と言此人大坂の産にして江戸に下り立物と成名高し

野 沢 藤 三 郎

三ヶ津修行して立物と成後に二代目八兵衛となる(十六カ)

初 勇二と言 鶴 沢 吾 八

立物にて音色よく語りよし

前名 喜三郎 野 沢 良 助

事知りにて名高し

人 形 方

吉 田 文 吾

文三郎弟立物にて名高し

吉 田 才 治

古今面白くつかひ上手にて名高し

吉 田 冠 蔵

大丈夫にて昔より立物なり

藤 井 弥 市

江戸の希者にて女郎遣ひの上手なり

五七

桐竹門藏

江戸に下り評判よく立物なり

豊松重五郎〔十七才〕

豊竹座の女郎遣ひ立ものなり

前名 万吉 吉田 三郎兵衛

名古屋より江戸に下り立物也

吉田 藤九郎

吉田 乙五郎

豊松 東十郎

吉田 冠二

吉田 新吾

吉田 岩五郎

吉川 清次

此人々後に立物となりおもひ／＼に遣ひわけ末々にて立物
となり名高し」〔十七才〕

江戸

太夫
三味線

評判記

道に曇らぬますかゝ見

附り 是か浮世の誠なり

大坂下り 竹本 土佐太夫

下り 竹本氏 太夫

如何様これは斯もあらん

津賀太夫

ア、ぎよふくしい

附り 神武此方ないづなはたへ

細太夫改 住 太夫

かたじけないおっしやりよふ

(一オ)

附り かたちははでに気はしをれ

越 太夫

聞とゞけしが詮議はすまぬ

附り 表は忠義に見せかけて

江戸太夫三味線評判記

ヤアむねんなり

附り けふの仰にがゝをれた

浪 太夫

なまぬるくやられしな

春 太夫

たった一口

附り どふなる事か

若 太夫

呑込ぬふらちく

(一シ)

志賀太夫

私のはからひなく

咲 太夫

終なければ始もなし

雛 太夫

嶋 太夫

ヤア知らずんばしらぬにせよ

(二七)

蟻風改
播磨太夫

ものひそやかに

義理づくめ

なを望まるゝ三味線
附り 正しき本てうし

頼母太夫改
祖 太夫

大坂下り 勝造改 蟻 鳳

ものやはらかに

理をせめて

ア、うとましかたりける

組 太夫

同人門弟 下り 市 造

コリヤなんじや

沢 太夫

虎の威をかる狐

ベリくとはしやいだおとほね

(二八)

野沢庄次郎改
紋 太夫

糸も心も乱るゝばかり

友ほうばいのかほよこし

津 太夫

木綿木綿と落ぶれし

何をいふてもしらぬがしんじつ

佐賀太夫

モヲよいハ三味線やめい

なが居はおそれ

出水太夫

その身のみやうが

ばちびんあたまをかくばかり

(二九)

あしからまじ

久米次郎改 久米五郎

(四〇)

久米五郎改 霧 松

東 蔵

勘 五 郎

萬人のそしりをうけても

ム、さもありなん

心のてんじひきしめて

いかな乱るゝねゝもなし

自身の手並見せつけて

糸もやさしき

水あげかぬる風情なり

何やらしさいらしい

すぐさま都におしのぼり

利平

重五郎

源次郎

(四ツ)

喜次郎

五助改
定四郎

蟻七改
紋左衛門

庄兵衛

(五オ)

清四

仲二

しらぬ事は是非もなし

ヤアものども

いらぬせわ御むよふく」(七オ)

庄蔵

(五シ)

喜代太夫

須賀太夫

律太夫

霧太夫

三輪太夫」(六オ)

美名太夫

音太夫

辨蔵

光蔵

源太郎」(六ク)

竹本不断櫻

外題大評判竹本不断桜序

けたいお、ひやうはんたけもふたんきくろ
今哉百民萬戸静なる徳風に逢て落たるを拾はす敵を争はす
たのしみたるあし
樂を樂んで足を空にするの時至て其藝又其業一ならず百
くはみたまき
華乱れ咲き」(二) 既語街に溢る夫か中に上るりの音曲尤
盛んにして老少となく既ふこと年有因茲近來操年代記
竹豊故夏外題年鑑等此道の盛花をあくる事等るに指」(一) 乙
たゆし中にも年鑑殊にくはしく芝居の濫觴初日の年月大夫
の進退其外操一通の品もれたる処なし然あれともいままた
浄瑠璃の位付を見聞す予壯盛の昔」(三) 乙より晩歳の今迄見
たる処の上るりに己か意に任せて位付に分置たるもの有人
に見すへきにも有されは独閑夜の友として燈下に操返す事
亦久し累日若輩達」(二) の見出て爰へも見せよそこへも貧
写せと言争ふも又一興也是此一道繁采の勇しなれば拾置
に能なしとは是非なしに桜木にわりはめ予に前書せよと筆取
墨を染て」(三) 乙はたる辞語時あれともおして免さす爰を
以不斷桜と号し夏は竹本の末葉の久敷米て毎時弥生の花

盛をたかへしと思ふも最眞口ならんかし

宝曆己卯中秋望日 歎操山人書」(三) 乙

外題 評判 竹本不断櫻見立魚盡

大極上上吉

父は唐土 母は日本 国性爺合戦

三年こしの大当り芝居かゝりはにきはひ渡る鯨

上上吉

同 後 日 合 戦

打つゝいての評判はいつみてもいさきよい上り鮎

大上上吉

曾 根 崎 心 中

世話事の元祖色夏は此うへない海鰻」(四) 乙

上上

鍵 権 三 重 帷 子

花も実も有るいきつく名のひゞくは所々鯽鱒

上上 聖徳太子繪傳記

ちつと堅すきたやうなれともこのよい干鯨からさけ

上上 山崎与二兵衛壽門松

嵐氏の箱入きやうけんつられてのおゝい鯨はぜ

上上吉 日本振袖初

神代のうはさかなにやはらは塵にまじはる川鯢かわあひ「(四〇)」

上上吉 曾我会稽山

晴わたる趣向はお江戸に名たかひ初鯢はつかつを

上 日連上人記

七字のくりき書集た七くたりに入はます鯢ます

上 傾城酒呑童子

鬼かとおもへは女の名にやはらく鯢なよし

上 博多小女郎浪枕

うつくしうてきれいてすたる所のない烏賊いか「(五〇)」

上上 善光寺堂供養

三国伝来のこんたん作者はすなはち鯢だんぎほう

上上吉 本朝三国志

堅ふやはらかでしかも葉になる金海鼠きんこ

竹本不断桜

上上吉 平家女護島

俊寛の場は今の世迄段々出せる鯢あなな

上上 島原蛙合戦

画ふみの段のうれいか此上るりの鯢鯢にべ「(五〇)」

上上吉 国性爺合戦

日本の名を唐てあげた其父のもとに鯢子からすみ

上上上吉 井筒河内通

むかし男の當世事文句も一しほや刺鯢さしきは

上上吉 双子角田川

奴かはたらきにひやうはんもついてのほる竜門の鯢りゅうもんこひ

上 日本武尊東鑑

何しても見物は一口にのみこむ鯢鯢あんこう「(六〇)」

上上吉 小はる心中天網島

看板か出ると見にゆく人は横になつてはしる鯢かに

上上吉 攝津国女夫池

千疊敷の出かたり座中の名は千里に化鯢とひうを

上 女殺油地獄

きくと其まゝたくさんと思ひつき毎日の大煎海鼠いりこ

上上吉 信 劬川 中島 合戦

めつらしい山のかさり子も婆も見に車海老まひ」(六ツ)

上上 唐土 嘶今 国性 爺

ところかも間にあふて実のある飯鮓いいたこ

上 浦 嶋 年 代 記

七世の孫にあふよろこひに入はこち鮓く

上上吉 心 中 宵 庚 申

すんとして口あたりよふ女中のすく金線魚いとより

上上上吉 佛 御 前 扇 車

ノリ地の矢聲一網に引よせる鮓いわし」(七キ)

上上上吉 大 塔 宮 曦 鑑

身かはり音頭のおもしろきは天守にきらめく鮓しやちほこ

上上 櫻 町 昔 名 花

きれいさは水にうつして見へすく水浅鯉ミツらさあひ

上上吉 関 八 劬 繫 馬

大火にもひけをとらぬ十日かはりで時を鯛あそ

上上吉 右 大 將 鎌 倉 実 記

近松のなこり狂言ひいき衆は目を鮓うるめ」(七ツ)

上上吉 鼎 軍 談

仕組なら人形なら唐めいた海茸うみたけ

上上 出世 奴 稚 物 語

日吉丸のむかし語すれのよいかんとう似鮓つはす

上上 復 鳥 羽 戀 塚

序から切まであきてのない蒲鉾かまぼこ

極上上吉 大 内 裏 大 友 眞 鳥

国せんや此かた大當り千万おめて鯛たい」(八オ)

上上吉 伊 勢 平 氏 年 々 鑑

真島におとらぬひやうはん時を近江鮓あな

上上吉 前 鼎 軍 談

後 敵 討 未 刻 の 太 鼓

上上吉 七 小 町

何所を見てもよいとうのはさきやうといは螺いな

太上上吉 三 莊 太 夫 五 人 嬢

外題できいてもきくのよい山生魚さんしやううを」(八ウ)

上上吉 工 藤 左 衛 門 富 士 日 記

祐経は実ても悪らしいすっぱん

櫻上上吉 加賀国篠原合戦

巴女の布さらしに見物はこし打ぬかしてふな鮎ふな

上上吉 尼御臺由井演出

正説をあつめて色は似ねとよふ似た海鰯ちぬたい

上上吉 大塔宮 礧 鎧

又見ても見あかすずんとおもひ石首いしもち「九才」

上 眉間尺象貢

ちうとから京のほりて當ふん上テておく丸鰯たなこ

上上吉 京土産名所并筒

一番とつと落のくる清水のふたいから手の下目刺めさし

太上上吉 三浦大助紅梅靱

ためし物の場はすぐやきは名作きやうとふ鱈あじ

上上吉 信 劾 姨 捨 山

月の名所見へ渡るしゆかうにいやか上へ江豚いるか「九才」

上上吉 須磨都源平躑躅

敦盛のかはり姿男か女か頭か尻か生海鼠なまこ

上上吉 国性爺合戦

出る度に一度く名のあかる鮎はまち

竹本不断桜

大上上吉 鬼一法眼三畧巻

めさましい三段目とこれも一當りつゝある身鯨みくしる

上上吉 増補用明天皇

初日か出ると鐘入をきにくるくんじゆは汗たら鰯く「十才」

上上吉 伊達染手綱

戀女房の下染たつないろよふ出来た紅子はらこ

上上吉 壇浦兜軍記

ことせめの段にきゝった見物は鯨ふか

上上吉 大友の眞鳥

介八かね道の二おもて扱もよふ似た口魚くろたい

上上吉 車還合戦櫻

大もり彦七のあやつりは人よりうこく手長鰯てながたこ「十才」

上上吉 元日金年越

ゆかりの十徳によねのきものはとんす金卵虫こんちゅう

上上吉 應神天皇八白幡

政大夫をを義大夫に日にましてのはる目白めしろ

上上吉 河内かよひ

一もふけて跡も又うまみはのかめ煎完いりから

太極上上吉 芦屋道満大内鑑

此上るりさへきけは子供のよなきもしつまる心よい居り小
たい」(十二オ)

上上吉 甲賀三郎窟物語

大切りのしゝまひは近年大あやつり花かさくらたゝき

上上 赤松円心緑陣幕

受領のしうきて大道も表も人は難唯鯨さこすし

上上吉 敵討鑑樓錦

みのゝ下から出た竹杖ぬいて見せる太刀魚たらちを

上上 猿丸大夫鹿巻毫

道鏡は出家でもないものゝ又俗でもない海月くらげ」(十二シ)

大上上吉 御所桜堀川夜討

此二段目ほとんどの出来ものはめつた有まひ上鯨さめ

上上吉 大政入道兵庫岬

ひやうはんはそこらあたり引つり引はる鯛鯨くもだこ

太上上吉 行平磯馴松

しつほりとしたふし事はつはるをいはふ鯛こまめ

大上上吉 小栗判官車街道

太郎か作りあほうはきつしりとした鉄魚てつきよ」(十二オ)

真極上上吉 ひらかな盛衰記

打揃ふての大出来とつこにも言ふんかないあらひ鯨すき

上上 今川本領猫魔館

少々まへめなれとすぐ人はうれしかる海膽うに

上上吉 將門冠合戦

七人のかはは赤いも有青いのもある丹後鯨たんごいわし

上上吉 前百日常我
後恋八卦柱暦

近松のついせんにむかしこよみを言かへて鯨しらいら」(十二ウ)

上上吉 伊豆院宣源氏鑑

汐干に見ゆる沖の石の引道具を見に鱸砂魚(七ウ) ますこ

真上上吉 新うす雪物語

道行二タ(七ウ)に四人のかけあひ見入た見物は鯨わに

上上 花衣いろは縁起

切のせつほうはあいらしい モロコ

上上吉 室町千疊敷

女天池なれとなにはのぼらはいせの魩鮓みやうけつ」(十三オ)

大上上吉 男 作 五 雁 金

文弥ては聞たれと義太夫ふしては初鯨はつしり

上上 入鹿 大臣 皇 都 靜

引もきらぬ見物に芝居の内はあつい鯨むら

上上吉 丹 勃 爺 打 栗

金平かいることはとこやらこわいやうな鯨ふぐ

上上吉 大 友 の 真 鳥

三度目もかはらぬ大入政大夫の出座もともに名を上た鯨ほろ

(十三)

上上吉 兎 源 氏 道 中 軍 記

春駒の段か大夫のかたりおさめ座中への鯨さば

上上吉 ひ ら か な 盛 衰 記

初ついせんの出かたりそうくかなみたの鯨かすのこ

上上吉 軍 法 富 士 見 西 行

道行は大將をのせてかふろか引てゆく白鯨うしろのした

上上吉 夏 祭 浪 花 鑑

長丁うらのどろ仕合ひよふあみ出した鯨かつをふし

上上吉 楠 昔 噺

五せつくを五段にして正成はまた若狹鯨わかさかれ

竹本不断桜

上上吉 前 佛 御 前

後 重 井 筒

二先師の追善めくる月日に弟子は糸師は針鯨はりうなぎ

大極上上吉 菅 原 伝 授 手 習 鑑

天満宮の神徳たつとふ大くんじゅちいもこしを尉斗のし

上上 傾 城 枕 軍 談

鳴つくしの四詰あらひはれのする棒鯨ぼうたら

才上上吉 義 経 千 本 櫻

源九郎のきつねふく一生のかぬ座中の仕合いッを鯨いさぎ

仮 名 手 本 忠 臣 蔵

此位付々おくに有り爰に畧す

上上吉 芦 屋 道 満

床はもめてもかはらぬさかへはきらめく銀魚ぎんぎよ

上上 栗 嶋 譜 嫁 入 雛 形

大すみの出かたりはうつくしい白魚しろうを

上上吉 双 蝶 々 曲 輪 日 記

箱入の進上物いつ迄もちのよい干鯨ひたし

六七

大上上吉 源平布引滝

篠原を若ふして綿くり馬にのりか来た子鱈はね

上上吉 国性爺

幾度出してもあたりはくちぬ金魚きんぎょ

上上 文武世継梅

上るりをさくのはしつほりとした日かよいアメノ魚

(十五)

当上上吉 戀女房染分手綱

道成寺なら道中双六なら小便の間も後に目のほし鰈うしろ かねい

上上吉 役行者大峯櫻

大和と政大夫のかけ合一はねくた鰈とちやう かねい

上 名筆傾城鑑

大津繪かぬけて出るひやうたんで鰈なます

上 世話言漢楚軍談

とこやらか唐めきすきた申海鼠くしこ 十六

上上吉 前川中島

後つゞれの錦

大安寺つゝみのしあひ今度の刀もよい切れ鰈あち

上上吉 伊達錦五十四郡

景清のかたきうちはれやかな目張めばる

当上上吉 愛護稚名歌勝開

あやつりも上るりもそろふて見事な大鱗ふり

上上吉 菖蒲前操弦

ふたいも人てまくも引そわつらふあやめのしうきは鱈さばら

(十六)

上上 小袖組貫練門平

人形のかほみせ座付キははぜににる池の鰈ふな

上上吉 うす雪

つま平の太はたらき扱もつよい鰈魚やつめうなき

上上吉 小野道風青柳硯

古今三筆の一人書たくるもふけはかな笏まなかつを

上上吉 庭涼操坐敷

おもしろい所をより出した思ひつき皆やくに立體はよ

上上吉 前拍子扇上るり合

後年忘坐敷操

手かはりなしゆこうてかてんさすきつい目黒めくろ

上上書 崇徳院讃岐傳記

四語は菅少將に似たさいら細魚さいり

上上書 鬼 一 法 眼

二度目たけ少しさいう見へる青煎魚さいし

上上書 平惟茂凱陣紅葉

大和ばのき、事いきはひのつよき鱸うなぎ「十七」

当上上書 姫小松子日の遊

中古の大當りめつらしい 松江鱸すんこうのすゝき

上上書 薩摩歌妓鏡

二女夫の入くみさつはりかたりはけた魚くち

上上書 昔男春日野小町

歌よみのたちあひほりたしたこかねの鯽かます

上上書 敵討崇禪寺馬場

松の合からやりのさきからくと鮪はな「十八」

上上書 菅原傳授

ちつとの間かたつてもよい事はいつもよい大鮪おおいを

上上書 蛭小島武勇問答

すもふて大出来出すとれる鮪たこ

竹本不斷桜

太上上書 日高川入相花王

ますく日の出のはんしやうまはゆひほといろのよい鮭さけ

此跡は追々に評判いたしましやう「十八」

惣巻軸

太極上上書 仮名手本忠臣蔵

是迄いろくにしたのを見たれと其中てのかなかしら

方頭魚

此時大夫衆の入かはりにて

中程より相やすみ残念

依而評判しはらくあつかり

又重而の時に中へ黒を入

ましやう「十九」

外題 豊竹常盤松全
大評判

右追付本出し申候御求御覽可被下候「十九」

儀多百品眞

七〇

古今
評判
儀多
百品
眞

十目の見る所十手の指差所

全出来

(絵)

初段から

五段目迄

ねじめのよい

糸くら

新浄瑠

理類

世話事は

当りの

つよい

ばち

めん

(絵)

「こ」

作者

式部笑

古今浄瑠璃大評判惣目録附

さかい町

ふきや町

各様

「こ」

豊竹肥前
結城孫三郎

國性爺細評並に北条時頼其外有増全部三冊に書續追而考御
目に懸可申候

評判
後日
残の雪

三冊

さかい町

薩摩座 小平太

上上吉 天神記

門左エ門

○見たて謡にたて左のことし

太

極上上吉 國性爺合戦

門左エ門

狂言は此上のなく高砂

太上吉 浦嶋年代記

門左エ門

初段からすぎ間のない和布刈

上上吉 應神天王八白幡

文耕堂

見物の氣引かね平

上上吉 眉間尺象貢

竹田出雲

評判の色ます紅葉狩

上上吉 四天王寺伽覽鑑

「(ニヤ)

近年にない評判大江山

上上吉 菅原傳授手習鑑

出雲

見物は面白いと夕かほ

上上吉 役行者大峯櫻

外記

世上へ評判響く雷天マ、ヘ、カ

儀多百品風

評判もよし玉の井

上上吉 日本武尊東鑑

同

大入の金箱は百萬

上上 武烈天王艤

太郎兵衛

段ころのくる舟弁けい

上上 蟬丸

近松

▲

上上吉 本朝三國志

同

日本中へ評判はとうる

上上吉 三日太平記

半治

朝から出しやって三井寺

上上吉 九芻与次兵衛灘

半次

大夫の語り様てよい所も声刈

上上吉 三國無雙奴請狀

見物のわき出る井筒

上上吉 後太平記瓢実録

大入の有は九ツの東北

上上吉

仮名手本忠臣藏

出雲

中でも尊の竹生嶋

榊方武士鑑

忠臣講訳

上上吉

いづれ甲乙のない羅生門

金釜短尺

いろは藏三組盃

上上

忠臣いろは実記

上上

碁盤太平記

△

上上吉

井筒業平河内通

近松

五段目迄そろって切かぬる鉢の木

上上吉

競伊勢物語

あいくとうと人なをしほ

上上吉

倭仮名在原系図

狂言は水筋のわかる海士

上上吉

倭歌月見松

安田阿契

大人故座元はのふみや

上上吉

初冠賤装束

奥野栄次

段々花見のさくら川

上上+

行平磯馴松

文耕堂

▲

上上吉

神靈矢口渡

鬼外

はげしくて目のさめる壇風

上上吉

太平記菊水巻

小出雲

釣をはつきぬ大入は八嶋

上上吉

相模入道千疋犬

門左エ門

跡の衆は御目録にのもり

上上+

官軍一統志

△ (三)

上上+

吉野合戦名歌兜

冠子

上上+

尊氏將軍一代鑑

宗助

▲

上上吉

日高川入相花王

小出雲

拍子幕は面白い道城寺

上上吉

戀女房染分手綱

冠子

江戸の氣にそむといふ杜若

上上吉

花襪會稽^{マ、襪カ}掲布染

專助

評判の玉よふは自然居士

上上吉

釜淵二ツ巴

宗助

末はやふれ連るは薔

上上吉

振袖天神記

半治

人の好手はあつもり

上上吉

鯛屋貞柳歳旦開

^{マ、ハカ}大と清か春日龍神

外記

「(四オ)

上上吉

愛護若名歌勝閑

外記

△

双蝶々曲輪日記

宗助

とちらへも渡りあへ橋弁慶

上上吉

夏祭難波鑑

文耕堂

△

敵討樓錦

小出雲

お染久松妹背門松

上上吉

見物は駒を引蟻とをし

專助

△

新板累物語

出雲

良輔

良輔

上上吉

工藤左エ門富士日記

出雲

評判の落ちいて来た白髭

儀多百品頂

七三

上上

天竺徳兵衛古今鑑

半治

男作五ツ厂金

出雲

上

とちらへもよらぬ嵐山

同

由井濱^マ千軒長者

門エ左門

壽門松

紀上太郎

位難定

糸櫻本町育

荒事はうつくしい楊貴妃

江戸自惚戀商人

松貫四

上上

戀娘昔八丈

松貫四

年を越へても見物はたへま

「(四オ)

「(四オ)

上上言 一谷嫩軍記 宗 助

三段目を見たかる藤戸

上上言 田村丸鈴鹿合戦 一 鳥

せつくくの看板であんまり(あ、腹ヲ)漕

上上言 祇園女御九重錦 笛 躬

看板が出るすへは松風

上上言 蒲冠者藤戸合戦 宗 助

面白と評判は山姥

上上言 苅宜桑門筑紫鞆 丈 助

五段目は表でよい本かたみマ、(花ヲ)

上上言 佛御前扇軍 近 松

近松の作はかたくつてよい石ばしマ、(車カ)

△

上上言 古戦場鏡懸松 丈 助

始まると泣て斗居る殺生石マ、(増カ)

上上言 鎌倉大系図 太郎兵衛

茶の湯の所は面白い通圖

上上言 弘徽殿鶉羽産家 近 松

もちつとで張そ弓八幡

上上言 物草太良

身替の所は切落しも鳴たす蟬丸

巻頭

上上言 奥州安達ヶ原

弓勢智勇湊 鬼 外

上上言 伊達錦五十四郡 外 記

双子隅田川 門左エ門

義經千本櫻

巻軸

位の甲乙で品マ、(負カ)置せきてら

上上言 三浦大助紅梅豹

次第くくに光りのます玉(か、腹カ)つら

上上言 ひらかな盛衰紀 文 耕 堂

簪付のうまいもち月

上上言 鎮西八郎唐船

始ると急度見ての有大概若

上上齋 壇浦兜軍記

八千年も松東方朔

上上齋 甲賀三郎窟物語

千秋万歳といをふせ鶴龜

上上齋 倭哥かるた

上上齋 東鑑御狩卷

前太平記古跡鑑

跡の評ばんをまつむし

上上齋 和田合戦女舞鶴

荒事はそうくしくて寝覚

上上 都鳥東古跡

上上 関八笏繫馬

上上 姫山姥

上上 孕常盤

かんしんの所か少し落葉

上上 百日曾我

相馬太良莠軍談

儀多百晶眞

文耕堂

出雲

「(五ツ)

近松

丈輔

宗輔

南郷軒

門左エ門

門左エ門

同

永輔

門左エ門

上上

曾我扇八景

二人静胎内探

江戸中の評はんを松山かゝみ

上上

源氏烏帽子折

上上

復鳥羽戀塚

惣巻軸

極上上吉

日本振袖始

よほと通しのいる唐船

享保九年十一月廿一日

俗名近松門左衛門

一寸御断申上まする門左エ門儀安永五年近早五十四年に成られまし
た一遍の御回向奉願上候

淨瑠理作者

近松門左エ門

西沢二風

安田阿契

並木丈助

為永太郎兵衛

梁鹿軒

三好松洛

安田蛙文

松貫四

吉田冠子

菅專助

福内鬼外

竹田外記

浅田一鳥

黒藏主

並木永輔

豊田正蔵

並木千柳

同	良輔	竹田出雲	
若竹	笛躬	竹田小出雲	以上
文	耕堂	竹田小泉	此外
長谷川	千四	安田阿契	あまた
近松	半治	並木宗介	あり」(六)

序

四海浪靜にて国は治り時津風とうたひなかる門にたゝすと露命をつなきし浪人生れは上方者にて江戸は繁昌の地と聞ケはさらば是からちとかせきに下ろうとわつかの路金をあてに随分店賃の安い處を見たて九尺に二間の裏を借り東北寛弥と宿札を出しあたり近所の子供にも諷でも教へる様に成と弟子も次第にふへ工面も少くしな残り暮し居る内隣へ講釈師の軍紀といふもの引こしけるがわづかの内に十年もなじんだものゝ様になり互いに心安く身の上の事杯はなし合ふ所へ家主よりおふたり様ながら今晩は甲子待て御座り舛れは茶飯をおふる舞申度と小女の迎に登ると式人は悦ひ是はく置事すくにやうかん色の羽織引かけせきはらひしなから家主の門口通り扱く今晩は存知よりませぬ御馳走預りますとあいさつして座に直る亭主左左エ門是はく「にうきそ御せサア皆様もおろくにくといゝさま膳を出ル」(七)と扱御存知の通今晩は甲子待に御されは少も趣向いたしましたといへば三人共すまぬ顔して軍記亭主に向へなる程儀太夫とふものも随分形をつめ老女にもわかりますやふによふこしらへましたもので御座る去ながら私共には一向わかり兼ねます此間もちと淨

るり本を読んで見ましたか古戯といふ(マ、ハカ)るりて五藤兵へか至て勇しの様に見へます先あれからしてうそてかためたものたといへば東北寛弥なるはと軍記丈のいわれる通ては御座れ共もとが狂言奇語と申せはさのみにくしうは御座りませぬ又諷などは格別なもので言葉つかひなとも至てけひませぬ先舟弁慶の諷などに義経少しもさわき玉わづとはいかさまひんのよいものアゝかたくはいわれぬと互に其道くの高惚斗りあいさつすれば亭主奎氣の毒かりなる程そふふたりの衆のやうにかたくいはれるも御尤きりながら当世にはハあいませぬなんでも有ふとも今晩の御馳走一段なんそ」(七)

(絵)

「ハカ

情深ひ所を語りたまへといへは障子の内にてははや三絃を調へるとやかて語出すは忠臣蔵十段目天河屋の段者ゝ耳をすまして聞居るとやかて貳人ながら手をうちハア我子殺さんとへいへとも一大事ヲ明さぬ所義信の見へて嬉しい事く成程今時花のは尤な事じや又軍氣焰とやゝこつかつてやわらかで仁儀礼智信の五道を守り悪は亡び善はその恵みをうくるの同理泰山の雨したゝりは石をうかつらかんきよくのつるべ縄はいけたおたつの謾みなこの同理のよた見なへ事斗りさらさり我らも此道に心かけましよと貳人のかたやも今はおふしてかんるいきものにめいじ誠によひ同理のものとかんし居る処に借し本屋の若いもの旦那此間の御頼の浄瑠璃名題松の覚ましたほど書付て参」(八)としました夜分には御座りますれとも今夕までとの御やくそく夫故へ持参致ましたと何やら書付を出せば亭主左左エ門是はく「よい時皆も是に居らるゝは幸ひむつかしい所は軍記丈に東北丈御兩人にまかせます先私は頭取役サアく是にの評判にかゝりませうと

いへは是は面白へ御趣かう夜の明る迄およばずなから申て見ませう
サア頭取役評判にかゝりませう

安永六ツのとし

酉の夏

作者

貳 笑

淨瑠理 甲乙品定

「(九才)

評判義多百品^マ眞

太極上吉 國性^{脱カ}(爺)合戦

〔本〕正徳五乙未十一月朔日より三年ごし十七ヶ月勤九仙山竹元頼
母内匠理太夫竹元文太夫三味線鶴沢三二三段目竹元政太夫豊竹方太
夫竹本難波罷出始て此淨瑠理を語る夫より享保五年正月二日より九
仙山頼母三味三治事鶴沢友次郎と改名夫より三度目享保十六年五月
五日天満ひいき組より芝居の表へ初めはたをたつる〔軍〕又は寛延
三年七月十六日九仙山大隅の掾ワキ千賀太夫三味線野沢喜八
夫より今安永二年までは教かきりを知らず〔東〕いつしてもく〔

(九才)

(正徳五年 国性爺合戦の挿絵)

あたりのはづれぬ上り中々評判かたれる様にこしらへてはおかね
淨瑠理でのお頭いゝの悪いのと口ではないはれぬ此上はない惣巻頭と

儀多百品眞

てももの事に大の字ケ黒付たいいつも大入大繁昌ひとへに光の御めく
み目でたしく
細評後遍にしるすべく候

大上上吉 浦嶋年代記

〔本〕扱此所が近松先生の作にて享保七年寅の三月三日に語り始ま
した初段から五段目迄ぬけあのない面白事く〔軍〕なる程本丈
のいわれる通り大上上吉でも悪くはない〔東〕したが一つのみ込ぬ
事か御座る浦嶋か妻実^マは亀のせいいいで酒に酔臥居る所へ浦嶋来り
おとせ共おきつよつて鬼の面をおふせ入るゝ次第に酔さめ〔千〕起
上り池水へうつし見れば目がろくにとめぬのかと池水へうつし見れ
はヤア鬼に成たかとおとろく所まつくらで見へぬ程で水かゝみの見
へるのは〔むた〕そこか亀のせいいいた〔本〕其様な處は大目に大
目に御ろうしで下さりませ先は評判よろしくちんてうくいわるに
一つうちましやうシャンくくく

上上吉 應神天皇八白幡

〔本〕茲か應神天皇〔東北〕までく浦嶋の跡へハツ白幡^マれはちつ
とつよきすぎる〔本〕御尤く同じ享保十九年寅二月朔日政太夫事
儀太夫と改名して語られました先は初段から大辺迄大てけく百
性は我娘の首へ大という字を書なげ〔千〕さかるゝ所請取ました
〔軍〕なるはと浦嶋二代目の大でけ〔大サウ〕ヨウア眉間はどうた

上上吉 眉間尺象貢

〔本〕東西く、則此評の象の貫で御ざります 大せい おつとまでく、伽藍鑑をさし置いてみけん尺とは頭取氣かちがつたの 〔本〕夫故位付を御ろうじませいつれ甲乙は御座りますまい 〔ひに〕ないともく、早く評判く 〔本〕四し明王太子の衣服を川上へ流し討手をまたる、所よし雲閣討手に承り身替の孫御瘡子をいけ取かへらる、所また三間尺母を象にのせての道行大でけく 〔東〕まてよ母を象に乗るとはあんまり 〔千三〕国姓爺の草双しを見る様た 〔軍〕末に三間尺釜の内より剣先を帝へふき付られる所まて有かたい事く、先は評判増く珍重く

上上吉

四天王寺伽藍鑑

〔本〕とぞ御待とうで御座りませう四天王寺伽らん鑑あかたの市の木のうちにかくれて山うつぎの矢を射り人見ごう所 〔軍〕きつい振袖の始のやふた 〔東〕山うつ木の立し故子供を連行は豊日の宮故子供を連行取かへし親へかへし百性共を味方に付る迄 〔ひき〕きついものく 〔見功者〕 〔千三〕是頭取其前にまだ妹子の大臣の山へ引こまれ三人の兄弟か女房あらそひの所面白ひ事だかなせあすこらはめぬの 〔本〕成程く随分おもしろふか、れました物で御座る此浄瑠理では皆様見物様かたが御存知の所故畧しました末守やの大臣太子を殺さんと障子ごしに娘をこらし驚く処有かたい事く、先は評判もよく珍とく

上上吉

菅原傳授手習鑑

〔本〕此浄瑠理は 大勢 まてく久しい物たが大峯桜と同じ位

〔千三〕位付はとうた 〔軍〕さればく座なみをころうじませ大峯桜の先へすへましたは毎年の歌舞岐芝居まして致されますれ共いつもく大入故此所へすへました 〔むた〕尤く早く評判が聞たい 〔本〕菅相丞をこくに入連行見れば木像ゆへ取かへし見れば亦まがいもなき菅相丞殿驚て立かへる 〔東〕木像に成つたり人になつたりいつまでもつきぬ評判先は大てい

上上吉

役行者大峯桜

〔本〕則役の行者 大せい コリヤとうだ 〔千三〕菅原次へ大峯桜とは板木で押たやふな評のしやうだこれじや、評判記はいらぬわへ 〔本〕御尤く位付に御氣を付られませ眉間尺伽藍鑑大峯桜同じ位で御そり舛れば先二幅対とたてました 〔ひいき〕そうたく三幅対の巻軸だはたはことつくと足駄と二の字を付るぞ 〔軍〕三幅対の巻軸は聞へたが少し聞へませぬ序幕天王祈のいのりの為役の行者神術を行ふといふ事を聞たいりへめさる、所 〔わい〕まてく三十五代欽明天王 甲午六年正月朔日に生まれまし 〔千三〕た此みかと三十九代天智天王迄てうど廿九年になりますあまより若過て 〔東〕さればく夫より四十四一四十二代己亥三年大和の国かつらき山にすみて神術を行ふと有 〔本〕いか様東北両のいはれる通りなる程若過ます次に襖こし両方もて身かへり面白ひ事く夫より次に大峯陀羅尼助五鬼前鬼の趣向よふ取組ました外に申分は御座りりもせぬ三ぶく対の巻軸てきましたく

上上吉

天神記

〔本〕正徳三_三二月廿五日大和太夫出座天拝山のふし事出語にてうまい事く〔人勢〕是頭取太夫の評判ではないこゝは天神さんだよ〔十四〕〔軍〕さればく白太夫血汐のけかれ故舟の友綱をまされん座とし其上へ菅相丞をのせ被参せに綱引の天神との調請取ました〔東〕成程何所と申分し御座らぬ〔ひいき〕知れた事先生の作によたな事有ものか〔大せい〕そう共く

上上吉

日本武尊東鑑

〔本〕享保五年三月六日〔むた〕これ頭取年代記より早くかの評判とく〔軍〕年代記から申さねば知れませぬ〔本〕日本武の尊始女の姿にて八十のたけるを殺す處大で夫より次に丈の高く成面色の替り俄に力の増所をはふ書しました〔東〕そうなければ〔十四〕ならぬ所〔大勢〕跡の評ばんが聞たい〔東〕先跡の趣向は十人並さして評する程の事なし

上上

武烈天皇議

〔本〕為永太郎兵衛始ての作にて殊の外の尺入_{マ、大カ}なれ共さして評する程の事なし元文五年五月十日此時佐手彦の人形へまゆ毛の動く事を仕始る

上上吉

本朝三國志

〔本〕享保四年二月十四日に語られ日と大入繁昌にていつとも人かはいます〔軍〕夫より嘉平次お通に鉄炮渡し櫻の鶴を目当に久吉をころせと松下嘉平治お通に殺されんといふ事をさとり〔十五〕

て小野のおつう我と我手に鉄炮にて死所〔東〕面白イ殊く夫より大切に三かんせめをあやつり狂言に取組ました所外にはない近松さん上るりので先生く

上上吉

三日太平記

〔本〕サア此評か三日太平記〔大せい〕是またれよ三日太平記とは出世太平記といふ事であらふ〔東〕さやふく則此處が出世太平記松下嘉平治の内へ武智をかくまい置真柴久吉奴姿にて光秀を貫に来る是にそ桶かはの洞丸成りとして鎧ひつをいだす嘉平次足にてけ飛せば内より武智が一子十次郎故驚く所〔軍〕夫より久吉の請状をかへし上座に直しう〔十五〕やまふ所〔本〕まてく夫も近松の三國に有し通りた〔本〕久吉時代はまたいくつも御座れ共皆と三國志の趣向少しづつ交ります〔むた〕此頭取はきつい近松品眞_{マ、負?}だのそんならなせあの蟬丸や出世景清はふ出東た〔軍〕されはく出世景清は近松氏義太夫上るりの最初には大坂道頓堀にて芝居興行のはじめは貞享二_二丑二月なり最初の上るりは世継曾我夫より五六度替り先師達の語られし古浄瑠璃にて仕廻同三年寅の春より近松門左エ門京都より〔十六〕新ものを作り越るゝ其第一は此景清少しわるくは有そうなものさ〔近松ひいき〕そうたく〔本〕まづいつ迄申ても上るりの名人と申は此御人何も申ぶん〔大せい〕御座らぬく

上上吉

九羽與治兵衛灘

〔本〕 さぞく御待とうで御座りませう則此所が九州与次兵衛が灘にてお国山三哥舞妓あやつりにての出三かん責の處加藤清正歸にのまれる所〔東〕 まてく今も三国志に有たてはないか〔軍〕 それくしかも三かんの王道行の文句迄一處も違へぬ〔本〕 夫より第四たん目舟頭与次（千六）兵衛実^マは三かんの者にて又山三といふものも同じく久吉をねらひ久吉の寝所へ忍ひ入れ共千鳥の香爐の鳴く故寄つく事あたわす^マ与次兵衛千鳥の鳴声をやまするには蜀紅の錦なりとて何心なく襦袢の片袖をちきり山三に渡す後三かんの者なりといふ事をさとり山三と言も久吉の家臣〔ひいき〕 そこに言ふんは有まい〔本〕 茲斗りても百三十式文のものは御座る〔ひいき〕 そんなら外は面白くないか〔軍〕 先初段二段三段目は何れ同じ趣向先は大ていく

上上吉

三國無更奴請狀

「（十七才）」

〔本〕 近頃出来ました上るりでは御さりますが評判記へのせました大勢 はやく評はとうたく〔本〕 されはく夫より松下嘉平治お通に鉄炮を渡し襖の鶴を目当に久吉をころせと〔軍〕 是く今も其やうな事が有たではないか〔東〕 夫く近松の三国志に一字も違ぬなる程本文のいわるゝとふり近松の三国志は久吉時代のよい他力だ〔ひいき〕 した事其一幕は丸では入て居るから三国の二字は取ぬ（マ、千六）ワスまたく少しつゝはいくつも御座る〔ひいき〕 外に何所が古い〔軍〕 夫を申てはつきませぬ是も永日（千七）ゆるく中ませう

上上吉

後太平記瓢蕒實録

〔本〕 ざして評する程の事もなし先は大ていく

上上吉

仮名手本忠臣蔵

〔本〕 初段から十一段目迄面白い事く〔軍〕 別而浅き匠の塩谷殿とは請取ましたこと分七段目揚屋の幕とて寺岡に本心をあかさる所〔東〕 まてく先達哥舞妓で見たが九太夫か死體へ由良の介か定紋の羽織をかけ加茂川へやれとは大とそくふかとそんずる〔忠臣蔵ひいき〕 是く凡忠臣蔵もあまたあれど是程の出来（千八）は有まるに何がそくふだ〔東〕 イヤ由良之介殿程の大もう思ひたつ人が羽織をぬいて着せ加茂川に流すとは後の所へ気がつかぬやうてちと書過しました又文の長い所を見てとはよふか、れました九段目本蔵切腹なとはよふわかります先は江戸中の評判もよく珍重く

上上吉

旗方武士鑑
忠臣講マ（衆カ）訳
忠臣金短尺
マ（衆カ）
いろは實記

〔本〕 何れも仮名手本につゝいての大でけ別而金短尺は小栗に横山面白く取組まし（千八）た四ツ一同に評判いたしてもおはらをたてらるな取方戯の大事は三ッ地に有との詞かんしんく

上上 碁盤太平記

〔本〕 近松の作にて忠臣蔵浄瑠璃の始也先は大てけく



上上 井筒業平河内通

〔本〕 東西く第一序幕維喬親王三美人の絵姿を見て伴の大納言宗岡むほんのすめよし夫より紀の名虎のどくろよみかへって維喬の味方せらるゝ所手つよくてよし夫より秦の祇人生^{千九}駒姫の首成と身かわりの桂の金吾と闇仕やいのたて面しろい事く先は評判よろしく楽しみく

上上 競伊勢物語

〔本〕 是か則いせ物語 大勢 そうなければならぬ事く 〔東〕 実定冠り打落され下部の姿となりすぐ其名お貫之との詞 〔軍〕 請取ませぬ実定の冠も落て貫之との二字定といふ字の冠をとれば正といふ字たかやうふて書ねばゆきては御座らぬ少しきうくつに聞へます 〔本〕 夫より次に記有つね身替りの「千九」所面白イ事くよふ儀理かわかりました見物が請取ます

上上 倭仮名在原系図

〔本〕 扱く此所初段から先は大でけく皆様御ぞんじの處故評を畧しました四段目奴蘭平わざと刀の光りにおちる所を面白書しました先は上く直でも悪くは有まい ひいき 有かたひく

儀多百品履

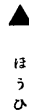
上上 倭歌月見松

扱此所に月光^{マ、見カ}の松時代は惟喬^{マ、親カ}仁王^{マ、争カ} 〔軍〕 次^{マ、見カ}に姫君を引分^{マ、親カ}かて隠居のあつからるゝ所よし姫君隣の屋敷へ逃さんと色々の我そはなしのふおばゝのふおやじとのくは「二十」きつい事く 〔東〕 是頭取氣がちがつたか評判でもするものがこれしきの事をひらぬかのふおはゝゝの幕は先生の作りて浦嶋年代記といふ浄瑠璃を其まゝにしたものた 〔本〕 なる程く夫もぞんじておりますが古きをもつて新しき趣向と申せは随分このくらしいの所はあり内く 大勢 そうだくとてもちつとつゝは古もありかちの事じや 〔本〕 御尤く先は評判よろしく珍とく

上上 初冠賤装束

〔本〕 この浄瑠理も近頃出来ました 〔軍〕 一ツ屋の姥お大我子の紀僧正を筆にてたゝき門の戸の「二十」大の字へ点をうてはおのれ故に犬になったとの詞請取ました 〔東〕 夫より紀僧正敢てかへし門の戸へ人といふ字を書し故戸冠し犬といふじはもとれといふ事とさとり立かへる所よし夫より業平前の池をさかさすれは人の手足桧扇の板に書有哥を見て是さそ今大内にてもてはやす御かな文字故此家は二条のきさきくまいある殊^{（縁）}を知り夫より後に紀僧正久虎事^{（而）}かたきの孔雀三郎故石柱を切て落せば 〔軍〕 冠に装束にて障子け放しての見へ大きくてよし次に秦蔵人桂の金吾闇仕やいの立 〔本〕 夫も今「三十」川内通に有たてはないか 〔本〕 さやふく此一幕は丸て持込みました 〔軍〕 夫より切に木曾のかけ橋の所哀で見物か泣

ます **ひいき** これく頭取夫程面白に本座敷はどふた **東**
夫故位附を御らうしませほんといふ分は御座りますまいないともく



ほうひ

上上吉 神靈矢口渡

〔本〕 近頃の大でき矢口の渡切より五段目迄ぬけめのないは此上る
第三段目立場の所 **〔軍〕** 手練の六郎には叶すじをいふ所を手練の
六郎叶はしとつたる出羽を殺ればあやまたす六郎か膝元へとに
いに **〔三十二〕** はの二字かはいらぬば成ませぬ **〔東〕** さやふく是
はちと鬼外丈のあやまりて御座る **ひいき** イヤあやまりではない
六郎にはといふと口にあまって語られぬわへ **〔本〕** 夫より訳其兵庫
が屋かた二の切嶋臺の文句迄はく書しました四の切頃兵への幕面白
い事く昔をわすれぬよふにろやみのくかさり物の詞請取ました
〔軍〕 したかおしい事によし峯虫ハミ落す時役にたてたい **〔東〕** 夫
より大切迄面白事く鬼外丈一の大でけ珍重く

上上吉 大平記菊水巻

〔本〕 是も皆様御存知の所故評 **〔三十三〕** を略しました扱夢はんじ
の才兵へ三人の夢をはんじる所面白趣向く才兵への子実氏は氏の常
悦にての見へきつものく何れ評判もよく大慶く

上上吉 相模入道千疋犬

近松の作に而先は大できく跡の衆は御目録のせました残念とく

上上吉 日高川入相花王

〔本〕 扱おなじもの日高川で御座ります道成寺の所作事初段から五
段目迄面白事くいついたされても近年のはやりもの **〔三十二〕** 夫
故評を略しました先は評判よろしくおてからく

上上吉 恋女房染分手綱

〔本〕 扱此所か染分手綱道中双六にて道行の文句かんしんく夫よ
り道成寺の能か面白事く何致ても大入く其外哥舞妓芝居にて致
されまし而も的をはづさぬ大はんじやう先は大慶く

上上吉 花襷會稽掲布染

〔本〕 扱此所は花だすき会けいのちんそめと申す上るり一ツたい
面しろう出来ました取分繁昌祭れいの場は見物かかんじんいたし
舛 **〔三十三〕** 末に至而敵打のば面白事近年の上るりては聞事く

上上吉 釜淵双級巴

〔本〕 爰元て評いたしまするは釜が淵ニツ巴さしたる面白みもこさ
りませぬ共五郎左エ門の女房五郎一の為にはまゝ母故あたりのつよ
い所をよふ書しました夫より真実を顯わし末に至り釜うでの所手つよ
ふてよふこさります先は有かたい事く

上上

振袖天神記

〔本〕誕生梅蘇生の松のいわれをよふ書はござれました画師〔三十三〕巨勢の金岡に帝綱伏の絵を頼みし故似せ気ちかひとなり綱伏の絵にはあらで女の姿を画き夫より共絵姿をもつてはいふとなし我娘を身替にたてらるゝ所かんしんく

上上

鯛屋貞柳歳旦開

〔本〕此所は鯛屋貞柳歳旦開近年出来ました浄瑠りにて蝶左エ門が一子貞柳の印籠を盗み夫より次に守袋を見我孫と知りなけかるゝ所
〔むた〕一寸見るとかるかやのやうだ
〔大せい〕夫で思ひ出したかるかやとうしんはとうたく
〔軍〕御尤く巻軸の部へ入て置ました〔二十四オ〕

愛護若名歌勝閑

双蝶々曲輪日記

上上

夏祭難波鑑

敵打樓之錦

〔本〕四ツ一同に評致ししやふ愛護若は山の段をよふ夢にて書れました双蝶々は歌舞故步居にてよふ致されます別而米屋の段引まどの段面白事夏祭は延享二年七月十六日の初ふたいこの時人形に帷子の衣裳を着せ始樓の錦は土手ばの所何れも面白事く

上上

お染久松妹背門松

新板果物語〔二十四オ〕

〔軍〕扱こゝ元かお染久松果物語兩評一所に致しませう先久松殿は質見せの所は聞事く
〔東〕果物語は絹川の所よふ書れました先は大ていく此時分のもてなんそしっくりとした新作か見たいく

天竺徳兵衛古帰鑑

上上

男作五ツ雁金

由良湊千軒長者

〔本〕天竺徳兵衛殿は蛙の術をつかふ所かんしんく五ツ雁かね
〔本〕千軒長者何れも大ていく

位難定

糸桜本町育

〔本〕此度出来ました浄瑠理にて大序〔三十五オ〕の詞をよふ書しました人王卅四代推古天王の御宇と浅草観音の縁起にて書れましたかんしんく
〔軍〕夫より綱五郎うらない者となり奥山の所糸やの母妙開綱五郎の身の上を聞次にわざと知らぬふりにての見へ面白事く夫より編笠を取れは我子故驚く所よし
〔東〕夫より小倉の色紙紛失の所
〔むた〕久しいものだ
〔本〕夫より屋敷の段も面白事次に小石川の段
〔大せい〕又筆太夫お駒はいふふし付なやらるゝ
〔本〕次

に行徳村の段岩藤の扇花咲をとらへ綱五郎の在家を白状させんと松葉いふしにせらるゝ所にくていにてよし夫より」(二十五) 次に綱五郎捕手との仕やい弥惣兵衛扇に縄をかけ来り岩藤が白状により綱五郎は糸屋のみせ相続の所迄出来ました先は珍重く

位難定 江戸自惚恋商人

是も小倉の御色紙が紛失のおこり同じ事にて本町育のほうがよはと面白ふ見へます

ほうひ

上上 一 戀娘昔八丈

〔本〕さぞ御待兼く扱近年もつはらはやりもの昔八丈あまり出来ました狂言では御座りませぬか年を越え動られましたは此上るり近年には珍らしい事」(二十六) 〔軍〕序幕勝時の茶入紛失の処むた 有かただ 〔東〕夫より屋敷の段後室つんはうの所大でけく 〔軍〕夫より白木屋の段幕明さの文句をよふ書ましたさりとては面白事く 〔軍〕近年の大入く 筆ひいき イヤあれは狂言て来るではない筆丈のふし付を聞に来るのだ 〔東〕番頭丈八白木屋しやない白子やのお駒じやとの詞請取ました 〔本〕次にお駒聲の喜蔵をころし 〔軍〕大切鈴が森の段哀れて見物袖をしほります 〔本〕夫より千年之介茶入のとうそく丈八をしほり来りお駒かしやめん状の所引かへして見物が嬉しかります夫より」(二十六) 後日色上ヶ深川染といふ外題の本をいたされましたなれ共評する程の事なし

大上上吉 北条時頼記

〔本〕享保二年四月八日此上るりを語り治切に雪の段迄面白事く 〔軍〕それはくいつ致しても大入大繁昌則座元の金箱く 〔東〕雪之段太夫上野塚ワキ和泉太夫三線野沢喜八出遣ひ人形藤井小三郎近本九八野中村彦三此前喜世太夫所太夫三輪太夫等相動四沢二風並木宗助安田蛙文作にて一の大で夫より同十二年二月二日」(二十七)

「(二十七)」

(享保十一年北条時頼記の挿絵)

雪の段大夫越前塚ワキ河内太夫三線藤四郎出遣ひ人形藤井小三郎同小八勘四郎等相動其時正面の床を今の横床になす其時より今迄の勤る事筆には中々書つくされず国性爺振袖についでの大でけ大せい」とてももの事に大の字を黒く付たい 〔本〕先は珍重と

上上吉 小野道風青柳硯

〔本〕扱此浄瑠璃は御名染の青柳硯にてとつこの駄六千丈座敷の所道行にての文句かんしんく夫より次に井戸茶碗の所面白事くいつ致し而も人がはいります先はお仕合く」(二十八)

上上吉 工藤左衛門富士日記

〔本〕東西く此所か富士日記の評て御座ります今迄此冒我もあまた御座れ共先当世にあいますは此上るり 〔はりぬ〕なんだかむしやうに誉るなく近松会稽山といふをまた見ぬか五月廿八日を初段か

ら大切まで作られたものはそこを置いて曾我の内での面白とはあんまりた[軍]次に雪の湯耳のきこゆる所などは面白とか有てよふかゝれました先此頂てにつゝ、いてもにくうは有まい[大せい]ないそゝ[東]先評判よくお仕合ゝ

上上吉

一谷嫩軍記

「二十八」

[李]並木宗助名残の作にて先は福りんとう故評を略しました[大せい]是頭取福りん糖は何の事だ[軍]御尤ゝ皆様御存知の処故へといふ事さ熊谷が女房陣所へ尋来る所かんしんゝおゝくは本をかりて御らうしませ

上上吉

田村丸鈴ヶ合戦

[大せい]まてゝ一の谷の跡へ田村丸とは[李]御尤ゝ夫故位付を御らうしませ[軍]あこきの平次殺生さんだんの浦へ網を引平次と書有笠を落し夫より平次をからめ引たつる所へ平尾の次郎蔵といふもの綱引のとが人なりと名乗出らるゝ所[東]平尾の平の字と次郎「二十九」蔵の次の字と間違にて次郎蔵をからめ行るゝ所[李]かんしん致しました一の谷の次へすへてもにくうは御座りますまい

上上吉

祇園女御九重錦

[李]さぞゝ御待かねてござりましやふ此所は九重錦[軍]初段から五段目迄大てけゝ取分鹿の血を油へつぎ影法師を鹿に見せる処面白事夫より火とほしの見へ[東]有かたい事ゝ

上上吉

蒲冠者藤戸合戦

[李]此上るり至而あきのこぬよふによくかゝれました物[むた]きつう事ゝちつとも申分はないそゝこまかに評するには及はぬ初段から五段目迄大てけ「二十九」[軍東]おゝせられます通り塩焼の藤太物語の所などは急度請取ました又跡に評いたす物あまた故先略します御しうしんの方は本をかりて御らうしませ先評判よく御手がらゝ

上上吉

菊宜桑門築紫輅

[李]東西と只今迄浄瑠璃あまた御座れ共五段目の面白いは此上るり[ひいき]おそらくつゝくものは有まい[東]扱おりばの所は見物が請取ました末に玉取の場などは面白事ゝ[軍]殊分いんらんの所かんしんゝ先は評判よくお手がらゝ

上上吉

佛御前扇車

[李]扱和吉殿お手がらゝ殊の外面白と評判に御座る[近松組]其「三十」はづさおらが先生のそへはきたのを[李]左様にお名も出て見へます清盛の始終気づよひ所よふかゝれました渋谷の庄司ケたいせし刀おのけとぬけ松の上のうばら(みか)をたいしる所[わる口]とんたからくりた竹田を見るやうた[軍]次に土佐次郎親の敵と重盛をねろう間違にて誠の敵は武蔵の左衛門と聞女房の真実の親なれは切かぬるうれい大でけゝ重盛の情にて土佐次郎を死人にならへてむしろをかけ門前へ追はろう所[わる口]きつ(みか)いせいなしとい

ふ身が有〔東〕末に清盛船遊山て鯨の夢咄し迄出来ました先は大慶

上上吉 古戦場鐘掛松 〔三十二〕

〔本〕扱御存知の古戦場先評判の所は蛙場なと後藤兵へ母の所へ来られ繪姿にてのお胸ものは我子ゆへのきみ合請取ました〔東〕かねへ石を打て其あかりにて読るゝ所〔軍〕までく釣鐘へ石を打つけ其あかりてよむとはあんまりな事た〔本〕御尤では御座りますがア致さぬはけしきがわるう御座ります故御見物の氣を引立てる様にと作者のおも入此位の所は有かちの事誠に狂言と思召れましやふ先は当代のきもの御仕合く

上上吉 鎌倉大系圖

〔本〕扱此所か鎌倉大系圖の評判〔わる口〕な〔三十一〕んだ大そふな改った口上〔本〕二幕目義盛のさいご時政が矢にての趣向はねつから面白くない〔軍〕末に茶の湯の段時政悪ひと見せ娘玉竹不日かいさせ真の心底あかし物かたりいたされる迄氣つよくてかんしんく時政が家の定紋三ツうろこのいはれ面白ふ書れました先は評判よくお仕合く

上上吉 弘徽殿鶉羽産屋

〔老人〕マシく近松殿待兼ましたく〔本〕なるはとこゝ元がこうきてんの浄瑠璃にせ今時のおかしみは見物が腹をかへます末に伊賀之介か忠臣の場請取ました〔わる口〕まてく大切左大將をこ

ろす場か余りはりや〔三十二〕いがないまちつと書よふか有そなふものだ〔軍〕御尤には御座りますか大切は先アいたさねは長ふ成ますいつれ近松の作じよさいも御座りますまい左様な所は大目に御ろうじませ先は大出来く

上上吉 物草太良

〔本〕此浄瑠璃は是と申所は見へませぬが〔ひいき〕其かはりにこゝが悪イと評うたるゝ所はない〔本〕中にも物草太郎けんしの湯我娘を身替りに立誠は千の利久と本名顯さるゝ迄見物か有かたいくと声かかゝり舛

巻頭 奥州安達原

弓勢智勇湊

上上吉 伊達錦五十四郡 〔三十二〕

双隅田川

義経千本桜

巻軸

〔本〕奥州安達か原文蔵、鶴ころしの幕明海士のちやりおかしい事く夫より文蔵、住家の段女房は〔む〕筆故そにん状持行所出来ました外ヶ浜南兵衛、ころしのとが人となり義家の前を引るゝ所きついものく夫より次に黒塚一ツ家の段恋衣をころし守り袋を見我子と知り夫よりくしけの内侍実是新羅三郎にて血汐の壺を谷へ落せば血

汐のけかれにてとつかの宝劍を水にて巻上る所有かたい事くみす
巻上れば玉木の宮黒塚の婆は重二重その見へ大きくて(三十三)
よし先は珍重く(一) [本] 扱此所智勇の湊 [ヒイキ] 定而いふん
は有まい [東] 成程く此浄瑠璃は随分出来ました大序の詞と四切
の留を綱で書した趣向 [わる口] なんの夫が新しい有やった
[軍] 次に熊井太郎か女房兄弟同士と聞て自害に至てひろい子に
て赤の他人とのもの語大出来く未にかつばのちやり [わる口] ま
てくそこをいっては大味増く [本] マア評判もよく大慶く(一)
[本] 此しやうる伊達錦一駄面白く出来ました先趣向の処は安平
の子息士農工商のみへ受取ました先はあらまし大慶く(一) [本] 此
所は隅田川先大序の内をもふ書まし(三十三) 次に人買の惣太にて
梅若丸としらすてうちやくの所大丈夫にかふ書れました後に懷より
守りをいたされて梅若丸と知り我こそ栗津の七郎と名乗らるゝ所よ
ふ哀に出来ました先は大い(一) [本] 扱御そんしの千本桜先初
段表皮は頼朝うら皮はよしつねなそらへいんせんに頼朝をうてとは
よく書ました殊分すしやの幕弥介誠は平のこれ盛にての仕うちいか
みの権太が悪心見物は片づをのんで居ります夫よりこれ盛の首と若
葉の内侍と梶原へ渡され親弥左エ門にころされ手負にての物がた
り(三十三) 誠は小金吾の首若葉の内侍といふは女房也と始て明す
所見物が嬉しかりとます [軍] 名題に迄義経と名をおしい事にすし
やの幕へ一寸てもだしたい [東] 次に忠信狐湯まで面白事く先
五ツ評の巻軸出来ましたく

上上言

ひらかな盛衰記

儀多百品風

[本] 扱おなじみの盛衰記先搦枝屋のちやりばは見物がはらをか、
へます夫より笹引の所面白事く梶原母妙弄鎧ひつへ千鳥を入源太
にやらるゝ迄きついものく夫より次にはたこやの段順礼の子(一)
三十四と取ちかひ若君の命さすかる所次に源太金につまり辻法る
ん弁慶の姿となり年く米を取処おかしし事夫か次にむけんかねの所
[見切者] まづ人々に無間のかねくといはれると此上るりの無間
のかねなければよい夫より大切迄おもしろい事く

上上言

三浦大助紅梅麴

[本] さぞ御待とうて御座りましやう先趣向の所是はと申義も見へ
ませぬがしかし八丁つふての喜平次書物留の役無筆故との物語出来
ました又三浦大助賀祝にて一家一門の祝儀湯尤やな(一) (三十四)

上上言

鎮西八郎唐船

[本] さして評する程の事も見へませぬが夫故目録の所へ気を付ま
した

上上言

壇浦兜軍記

[本] 東西く此所の壇浦の[大せい] 是頭取跡も段々有れば早く
流し給へ [軍] 成程く先此中の聞所はいばの十蔵講釈師にて景清
の身替り出来ました景清は十蔵とやつし頼朝の屋形へ入込て所受取
ました末に眼をくりぬき日向勾当となられる所先大てい(一)

上上言

甲賀三郎窟物語

〔本〕あまりさしたる事も見へま（二十五カ） せぬ甲賀三郎かんくつへ入られくがしまるゝ所よし 〔悪口〕まてゝ数千丈の洞へはいつたとなる此内見物は何をして居るのた 〔軍〕次に命つゝがなく逆臣のやつばら殺るゝ所迄急度してよいぞ大ていゝ

上上膏 和田合戦女舞まい靄

〔本〕扱此上るり上方にていたされ評判よく江戸中が今かくゝと本の出るのを致マ、待カした 〔悪口〕所か下りて見た所がねっから面白くないやつさ 〔見功者〕左様御座ります此内の見所は与市女房はんがく我子の身がはりといふ事をしらす其の仕うちうけとりました先は評判も大ていゝ

「（二十五カ）」

倭哥かるた

上上膏 東鑑御狩巻

前太平記右跡鑑コ、マ

〔本〕三人一所に評いたしませふ哥がるたは滝口横笛鳥つくしの文ン中宮哥かるたの文句何かんしんゝ東鑑は元服の所面白事ゝ前太平記は非人小屋の所油のやふな酒五升との詞請取ました何れ甲乙はござりますまい先は大ていゝ

関八忍繫馬

都鳥東古跡

上上膏

嬬山姥 〔三十六カ〕
孕常盤

〔本〕つなき馬は近松の作さして面白ともなし良門の妹胡蝶かおんねんの所少し面白ふ御座ります都鳥は南郷軒の作にて中にも人買の惣太本名粟津の七兵衛にて双子隅田川をなほされたりと見へます礪山姥は近松にてあまり出来ませぬ山姥の栗をひろひに行るゝ所ちと子供だましのよふた孕常盤は同作にて常盤御前を清盛よりせんききひしく牛若丸馬の口取て引廻しの所よはとあはれに見へます先は大ていゝ

（華カ）（文カ）

相馬太郎莠軍談 〔三十六カ〕

上上 百日曾我
曾我扇八景

二人静胎内探

〔本〕莠軍談は水輔殿作にて我門時代にて評する程の事なし五段目代もの嘶しはちとばかゝしく百日曾我扇八景近松の作あまり出来も見へませぬ二人静へ近松の作大津の宿にて二人の産所むねを分かれる所こまかくて見物か嬉しかります先は大ていゝ

惣巻軸

極上上吉 日本振袖始

享保三年二月廿三日是を語られま^{マ、(よ)}「三千七百」した先むつかしい時代をおふとり組れました^軍「軍」さやふく時代とい、狂見の趣向かんしんく^全「全」第一大序の詞六ア敷事をしました先私共には知れ兼ます^東「東」成程くあれにはちとむつかしい講釈は御座る一通りではわかりますまい^軍「軍」左様くと近松のは五段目迄の趣向をかへ大序詞で分ります^東「東」只今出来まする浄瑠璃は皆大序は出来ませぬかして始りから人の詞で書き出し^舛「舛」わる^口「口」イヤく其替りに近松の作は趣向か浅い^軍「軍」夫は御尤とこさりますれ共近松文のはさつぱりとして面白事く^{マ、(驚カ)}二の口ノちやり場は腹をか、へ舛三の中こたん^{マ、(驚カ)}来をそみん^{マ、(驚カ)}「三千八百」

(享保三年日本振袖始の挿絵)

「三千八百」

兄弟のたて面白事く末に手なつちの娘いなど姫大山ずみに屏風こしの見へそさのおの尊の替りに詞をかわされる所おかしみ有て見物は嬉しかります山うつな^{マ、(ホカ)}が立て人見御供にとらる、所見物が泣ます切に八雲狸とのふし事よふなれました取持近松先生の作てなければ惣巻頭巻軸はとれぬ残りの浄瑠璃はあまた御座る追而考評いたしませふ先は惣巻頭目出度ととと

安永六年

酉六月吉日

儀 多 百 品 眞 終

「三千八百」

儀 多 百 品 眞

浄瑠璃評判記集成 解説

評判 登利 合 横本一冊 明和二年三月刊

上野図書館蔵本を底本に用いたが、同書は題簽を欠き従来題名不明のものであった。今回日比谷図書館の加賀文庫本により、墨書の題簽ではあるが「評判登利合」と知り得た。これは書き題簽ではあるが、序文の趣向からも原題と考えられる。加賀文庫本は透写本である。縦三寸四分、横五寸 浪花東都軒の版。序文七丁、本文七丁合計十四丁本。

評判 三 極 志 (仮題) 横本一冊 明和三年梅見月序

原本は序文六丁、本文七丁の合計十三丁本であるが、完本が見当らなかった。四種の本を集めて底本を作った。四種の中で原本を使ったのは天理図書館蔵「義太夫評判記」だけである。同書は評判記の合綴集であるが、本文七丁を収めて序文六丁を欠いている。縦三寸四分、横五寸三分あるが、合綴する時に切り揃えているから、原本より小さくなっているかもしれない。次に日比谷図書館の加賀文庫本は全文を収めるが、透写本である。その他に豊竹山城少椽氏旧蔵本を近石素秋が翻刻して謄写印刷したものと、それとは別に同書の序文を横山正がペン写したものとがある。これら四種の本から、本文は天理本を、序文は加賀文庫本を底本に使い、他の二者を

参照した。いずれも題簽を欠くし、内題は附いていない。書名は、序文に「……三極志と題号し……」とあるので、仮題を「評判三極志」と附けた。戌年の評判記であるから、版心が「戊丁附」となっている。或いは「戌年評判三極志」などと、書名に戌の字を冠したかもしれない。

浄瑠璃 難 有 矣 横本一冊 安永六年三月刊

天理図書館所蔵の二本を底本に使った。一本は原装で原題簽のある完本で、他は「義太夫評判記」に合綴した本である。序文一丁、本文十五丁。序文の柱記は序、本文は丁附がある。川村弥兵衛版。縦三寸七分、横五寸一分。

浄瑠璃 闇 の 磔 横本三冊 天明元年九月刊

細川景正氏所蔵本を底本に使った。原装本で、中・下の二巻には原題簽がある。柱記と丁数は、「上之巻」十四丁、「中ノ巻」十三丁、「下巻」二十一丁と奥附。作者は八文字屋而笑で、安永十年(天明元年)孟春の序文がある。版元は丹波屋助七、増田源兵衛。横五寸三分、縦三寸七分。

豊竹本 音 曲 高 名 集 小本一冊 文化三年序

底本は天理図書館所蔵本。本文十七丁で丁附けがある。三味線弾き野沢重五郎、後の三代目野沢八兵衛の作。縦五寸六分、横三寸七分。

江戸 太夫 三味線 評判記 写本一冊

日比谷図書館加賀文庫蔵。本文六丁半。替表紙題簽には墨書にて、「江戸 太夫 三味線 評判記」とあり、表紙には中央に大きく「江戸 太夫 三味線 評判記」その右肩に「兜軍記纂責の段文句見立」更にその右肩に朱書にて「文政初の頃」とある。縦六寸二分、横四寸七分。もと／＼刊本の評判記ではなかったと思われるが、参考として掲載した。文政初年とあるが、太夫の動向（竹本氏太夫天保五年江戸下り十七年編版）から天保中頃のものと考えられる。

竹本 不断 桜 小本一冊 宝暦九年中秋望月序

早稻田大学演劇博物館本を底本に使った。竹本座で上演したあやとり浄瑠璃の評判記で、太夫や三味線の芸評とは違った趣向が見られる。この本に取り上げた浄瑠璃は、宝暦七年までは「外題年鑑」（宝暦版）により、それ以後はこの本が出版されるまでの二年間を補って、体裁を整えている。十九丁。縦五寸一分、横三寸六分。

儀多 百品 眞 横本一冊 安永六年六月刊

日比谷図書館加賀文庫蔵。表紙に墨書にて「古今 儀多百品眞」とあり題簽を欠くが、これは初丁広告の題名によったものと思われる。作者式笑。古今浄瑠璃の大評判と称して近松以降の浄瑠璃の評判を記し、近松に対する当時の評価がうかがえて興味深い。底本は写本で一応体裁は原本に忠実に（虫喰のあとまで記して八二頁上段参照）模写したものとと思われるが、誤謄誤写がきわめて多く、文意の通じない箇所が多い。

参考のためにあえて掲載した。縦三寸九分、横五寸三分。寒下敷三十八丁。

▼ 既 刊 一 覧

I 未刊浄瑠璃芸論集 (品切)

「竹子集」序跋 「大竹集」序 「小竹集」序 「千尋集」序 「新小竹集」序 「貞享四年義太夫段物集」序跋 「紫竹集」序 「当流浄瑠璃小百番」序、凡例 「浄瑠璃小菊丸」序跋 「竹本極秘伝」凡例 「竹本秘伝丸」凡例 「鸚鵡ヶ袖」序跋 「翁竹」序跋 「鸚鵡か園」序 「国姓爺大明丸」序 「竹本筑後掾門弟教訓並連盟状」 「浄瑠璃千疊敷添桂」序 「諸葛孔明鼎軍談絵尽」序 「浄瑠璃加賀羽二重」序 「富松時計草」序 「音曲縫小袖」序 「音曲大和課」序 「陸奥杣鎗劔」序 「豊曲不二劔」序跋 「音曲初日山」序 「音曲秀大全」序 「競伊勢物語」序 「音曲八の巻」跋 「音曲大湊」序 「荒御霊新田神徳」跋

II 浄瑠璃本所在目録 関西の部 (品切)

関西にある大学と図書館所蔵の浄瑠璃本を調査し、アイウエオ順に整理した所在目録

III 近松の研究と資料 (頒価百二十円 送料当方負担)

論文 近松研究の方法 (森 修) 「津戸三郎」と「門出八島」 (信多純一) 近松世話道行の物尽し (角田一郎) 近松犯罪浄瑠璃の展開 (横山 正) 江島其磧作「国姓爺明朝太平記」から見た「国姓爺合戦」について (石川潤二郎) 元祿上方かぶきにおける道化、特に「あほう」について (丸西美千男) 近世初期演劇年表考証 (佐古慶三) 資料 杉森家系譜 (甲、乙、丙) 同 親類書覚 同 願書

IV 浄瑠璃評判記集成 上 (頒価二百円 送料当方負担)

猿口齋 操曲浪花昔 浪のうねり鼎嚙 操西東見台 竹の春 新評判蛙歌 評判花相撲 角くむ慮 尚、浄瑠璃評判記集成 下は今秋刊行の予定です。

後記

◇ 浄瑠璃評判記 中巻 明和以降の翻刻を学界に送ります。原稿を集めて見ると頁数が一寸かさみましたので、太夫三味線人形の評判記以外の雑評判記に属する部分は下巻に廻すことになりました。

◇ 原稿は一応上巻と同時に出来ていたのですが、上巻が出来て、ほっとしているうちに学期末となり入試を控えて刑務所へ印刷が殺到して、到頭半年がすぎてしまいました。皆さんに申訳なく存じます。

◇ 会員が京都、大阪、奈良、神戸と分れていますので纏め役の信多氏（祐田氏と角田氏と私になっていたのがなまけてしまつて）にいろいろ面倒をかけました。

◇ 今回も東京在住の会員諸兄に資料の撮影や校訂などで協力を得ました。併せて感謝いたします。

◇ 「沼津」の平作ではありませんが「ヤット任せは声ばかり、一肩往つては立留り、ヤ今日は結構な天気ぢやなア。」が偽らぬ感想です。（吉永孝雄）

会 員

飯田正一	寺尾伸三郎	丸西美千男
石川潤二郎	ドナルド・キーン	向井芳樹
奥村俊彦	鳥居文子	森修
小島吉雄	鳥越文蔵	盛田嘉徳
信多純一	鳴尾栄二	山根為雄
諺訪春雄	野間光辰	山本とも子
近石泰秋	馬場憲二	祐田善雄
津田道夫	平野健次	横山正
土田衛	堀江哲朗	吉永孝雄
角田一郎	松平進	

（五十音順）

昭和三十五年七月一日発行

浄瑠璃評判記集成 中

演劇研究会

大阪市西淀川区姫里町一ノ三一
振替 大阪四四〇七七
印刷所 大阪刑務所印刷部